

み	ら	い	つ	く
				り
第	9	回		読
@				書
Z	o	o	m	会

- ・ 課題図書を読んでお集まりください。
- ・ 第8回はトルストイ『イワンの馬鹿』を読みました。
- ・ 第9回では続きの議論を行います。
(第8回の議論の詳細はホームページをご覧ください。)

第8回議論の詳細は
↓こちら↓



【日時】

2020年7月31日(金)10:00~11:00

【課題図書】

トルストイ『イワン・イリイチの死』
岩波文庫もしくは光文社古典新訳文庫

【参加方法】

興味のある方は、以下事務局までご連絡ください。
zoomのアドレスとパスワードを添付して返信いたします。

事務局：みらいつくり研究所 松井
Eメール：matsui-ka@kjnet.onmicrosoft.com

みらいつくり大学校企画

第9回みらいつくり読書会@zoom 記録

第10回は、2020/8/19の10:00~11:00に行います。興味のある方は下記事務局までご連絡ください。

事務局 みらいつくり研究所 松井

Eメール：matsui-ka@kjnet.onmicrosoft.com

【課題図書】	【実施日時】	【参加者】
トルストイ『イワン・イリッチの死』	2020/7/31 10:00~11:00	A,B,C,D

内容（※語尾を中心に編集しています）

A：皆さんは何訳で読んだんですか？僕は岩波新書でした。

B：僕は光文社で読みました。

C：私は岩波新書です。

D：私はインターネットにある書評をたくさん読みました。

C：今日までに『古典として読む イワンの馬鹿』も読みました。

A：ロシア文学にはまりそうですね。でも長いです。

D：長いのはいやですね。

C：私から言っていていいですか。私には覚えにくい名前がたくさん出てきて、一瞬挫けそうになりました。

A：フルネームで出てくるしね。

C：最初に出てくる人たちの中には、本筋にあまり関係のない人たちもいました。

C：いくつも面白いところがありました。今、私は別なところでクライマン『病いの語り』を読んでいます。「慢性の病い」や「死に至る病い」とつながってこの『イワン・イリッチの死』を読めるような気がして面白かったです。具体的には、身体性と精神性が合わさっているような感覚のことです。この本の中では、単に心と体を一つのものとして描いているというだけではなくて、身体と心それぞれに輪郭は残しつつ一つのものとして語っているような気がしました。身体と心は一つの対比ですが、主観と客観ということに関しても、入り混じっていくような書き方をしていると思いました。イワンが感じていることとして書かれていても、それが事実かどうかはわからないような書き方でした。果たして事実とは何かということですが、その辺のおり混ぜ方が面白いと思いました。

D：あらすじを読んできました。昔に書かれていた物語なのに、今に通じる話だと思いました。自分の出世とか、住んでいる所とか環境、美しい奥さん、そんな普通の人たちが求めるものをイワンも求め続けていました。それらは古臭い話ではないと思いました。今も通じる話だと思いました。普通のことを求めることが悪いことではないと思います。むしろありがちなことです。そして、この人は自分の死が近づくとつれて悶々としていてと書いてありました。そんなに悶々とするのかな、とも思いました。仕事と家族と、頑張ろうとすることがなんでそんなに悶々とするんだろうと思いました。「誰かのためにやったことがない」という文章がありました。主人公は自分のためだけに生きてきたということです。そんなことを人生の最後で後悔する、ということならば、自分本位に生きていくことが何か自分の人生を振り返る時の後悔の原因になるんだなと思いました。

B：僕は、ハイデガーの『存在と時間』を並行して読んでいるからだと思うのですが、イワンが病気に

なるまでのありようは、ハイデガーでいうところの「世人」です。要は「みんなこうだから自分も」という生き方です。「みんな欲しいと思うから自分も欲しい」ということを疑わない。最後、病床で彼は現存在に近づくのではないかと思いました。そのグラデーションが非常に面白かったです。キーパーソンの一人は奥さんです。トルストイは悪妻を持った人の代表とされています。「悪妻をもつと哲学者になる」という格言があります。よく例に出されるのが、ソクラテスとトルストイです。「悪妻は人を哲学者にする」ということですね。

A：僕たちは哲学者には慣れないですね。

B：なれないですね。

A：言ってみました。

D：はっはっは。

B：それ（この本に出てくる悪妻）は、トルストイの自伝的な側面でもあるのかなと思いました。

A：悪妻と離別したのは後期ですね。

B：そうですね。この人はのたれ死ぬはずです。

A：私的所有を否定していく、と言ったような話だったように思います。財産を人のものにしないというような。そんな話は奥さんからしたら「なんだそりゃ」ですね。

B：あと、もう一人のキーパーソンは、ゲラーシェムです。彼（イワン）の身の回りを見る人です。その人のあり方も気になりました。僕は病気になったことがあるので、人が活力に満ちていることを見るだけでダメージがあるという経験が実際にあります。他の人間の活力といったものがイワンにとっては…とあります。でもゲラーシェムの力と活力だけは…と書いています。自分が病気になって何もできない時に、普通の人が普通に元気にいるということを見ることも辛いというのはめっちゃめっちゃわかるんですね。でもこのゲラーシェムが元気であるということだけは耐えられた、むしろ慰めであったということです。ゲラーシェムという人のあり様に、僕は救済のようなものを感じました。彼の存在があったからこそ、イワン・イリッチは世人から現存在になるというある種の辛いプロセスを通り抜けられたのだと思いました。その辺が面白いと思いました。

A：僕も最初そのように読んでいました。すべて読んで、もう一度最初を読み直すと、ゲラーシェムはイワンが死んだ後にも出てきていることがわかります。その場面で、コート差し出すシーンがあります。主人が死んでどんな様子だいと聞かれるシーンです。そうすると、ゲラーシェムは「何事も神様の御心でございます」と答えます。「誰だってあそこに行くんですから」と。だから、ゲラーシェムが特別に主人に対して気遣いをしたというよりは、むしろ淡々と、そういうものだとして、自分が召使であるという仕事をしたままで、特別な感情はなかったということかと思いました。イワン・イリッチにとってはそこが良かったのかもしれないですが。

B：それもあるんでしょうね。

A：よく捉えると「嘘がない」ということです。そういう人なんだなと思って読みました。僕が読んで面白かったと思うのは、死に至るプロセスで、途中で内部の声が出てきます。自分自身と自分自身ではないけれど他者ではないものとの対話のシーンが出てきます。これってなんだと。10節のあたりです。内部の声が応えるとあります。苦しみはなんのためだと問うわけです。これがハイデガーでいうところの「良心の呼び声」であると思います。それが非常に面白かったです。あとは、一番最後、息子とのシーンがあります。息子がお父さんの手にキスをします。そこで何かが開けるという所です。

でもその時に「許してくれ」と言いたかったが「緩めてくれ」と言ってしまった、とあります。日本語だからこのようになっていたのか、その辺りはどうかわかりませんでした。

B：光文社にはロシア語がカタカナで書かれていました。振り仮名でふっています。

A：ではうまい翻訳なんですね。トルストイがキリスト教の文脈をもつからそうだと思いますが、キリスト教で「ゆるし」には大切な意味があります。でも「ゆるし」を「ゆるめて」と言ってしまったわけです。先程話題になった身体性と精神性ということだと思います。たとえば言い間違えたとしても、精神でゆるしてくれと言ったのであればそれでいいのだということなんだと思いました。最後に死ぬシーンがあります。「いよいよおしまいだ」と誰かが言います。そして彼はこの言葉を聞いて繰り返します。そして「死はおしまいだ」と言います。そして死はなくなったと。普通なら、この後死ぬということになりそうだけれど、彼にとっては別の定義になったのだと思います。死が恐れを抱かせる対象として向こうにあるということから、最後の最後に本当に死に至る直前に、光がさすようにして、死が完了するということに至っています。ハイデガーは全体性を獲得するプロセスに死があるといます。そんなことを考えながら読むと面白かったです。死の代わりに光があったと書いています。その先に、永遠の死があるのではなく、死が終わって、その先に永遠の光があったということです。多分にトルストイの宗教観が反映されているのだと思い面白かったです。

C：内部の声とありましたが、痛みと対話するところもありました。痛みを擬人化しているような場面です。私はその辺から引き込まれるようにして読みました。6節あたりでしょうか。「痛みは自分のすることを続けた」とあります。痛みを「あいつ」と表現して「差し向かいになった」「顔を突き合わせた」とあります。すごい面白かったです。

A：ハイデガー的には、現存在は平均的日常性においては、事物の側から理解していると言います。現存在はいろいろなあり方がありますが、最後の部分は「実存」と言えると思います。痛みというものも、現存在の実存ではなくて、痛みから自分を理解しているということなんだと思うと「あいつ」の意味がわかるような気がします。

B：最後死ぬ時に「死は終わった、もはや死はない」とあります。ここでいうのは「死」なんだけれど、意味合いは「誕生」である気がします。むしろ誕生のシーンに見えます。何か生まれた瞬間でもあります。この世の側からしたらある人の死が描かれているのですが、あちら側の世界ではある人が生まれたと描かれているところが面白いと思いました。「二度生まれ」という概念があります。もともと言ったのはエリック・エリクソンらしいです。人には「一度生まれ」の人と「二度生まれ」の人がいるということです。「一度生まれ」の人の特徴は、この世に自分がいることを至極自然なことであると思って疑わない。いわゆる世人的です。この世の価値観に疑いを持たない。でも世の中には「二度生まれ」という人がいます。そういう人たちは何か「この世に自分はいていいんだろうか」ということを思っています。そういう人たちの多くが、苦しみを経験して、もう一度生まれるんだと。そしてその人本来のものとなる、という人たちがいます。そんな人たちは深い精神性を獲得するというんです。神谷美恵子は、ハンセン氏病のケアをした人ですが、ハンセン氏病の人の中には「二度生まれ」的な精神性をもつ人が多いと書いていました。『生きがいについて』だったと思います。イワン・イリッチについては、死んだ瞬間に「二度生まれ」をしたんだと言えるのかもしれない。病気になるまでは典型的な「一度生まれ」の人でした。自分がこの世にいるのが当たり前だと思っています。生まれた瞬間、そんなカタルシスがクライマックスになっていることも面白かったです。

D：それはキリスト教的な考えですか？例えば仏教の輪廻転生とは違うのでしょうか。

A：「二度生まれ」をキリスト的な文脈で言うと、新生と言うかもしれません。回心とも言うのでしょうか。過去の世間的な生き方をしていたけれども、神を知って回心すると言ったようなことかもしれませんね。神谷美恵子さんはクリスチャンではなかったのかもしれませんが、ハンセン氏病の人はクリスチャンの人が多くいますよね。

B：そうですね。すごく多いと思います。

D：ふーん。

B：ハンセン氏病の施設が清瀬にあります。そこに行ったことがあります。今日 NBA が再開されるのですが「バブルの中で行われている」と喩えられています。それは、フロリダのディズニーリゾートの中に、あと二ヶ月誰もそこから出ないし誰も入ってこないと言う状況をつくるんです。それは泡の中に入ると言う意味で「バブル」と表現されます。そう言う意味でハンセン氏病の施設は「バブル」です。その中に、上下水道場があるんです。すごいですよね。全部がそこで完結するようになっているんですよね。僕が驚いたのは、各種寺院があるんです。寺、神社、カトリックの教会、自由主義の教会、プロテスタントの教会…といった感じです。どの宗派でも選べるんです。宗教の自由は担保するんだけど、出てはいけなし入ってはいけなしなんです。キリスト教徒が多いのはそんなことも関係しているように思います。あとは、高松宮さんが関わっています。昭和天皇の弟です。彼はほぼクリスチャンであると思います。公式には当然言えませんが、内面がクリスチャンであることが状況証拠からわかってきます。彼の家庭教師は賀川豊彦でした。また、彼は ICU の設立に関わっています。もともとはキリスト教学部を東大につくるという計画がありました。それが頓挫して、国際キリスト教大学になったわけです。その日本で基金を募ったのが高松宮で、アメリカで基金を募ったのがマッカーサーです。そして彼はああいう全生会もつくるわけです。全生会の資料館には、いかにキリスト教が素晴らしいか、クリスチャンがハンセン氏病のケアをいかにしてきたかがつらつらと書かれています。高松宮は本気でキリスト教を日本に広めたいと考えていたのではないかと思います。全生会に行って僕はそう思いました。

D：すごい話ですね。

A：ハンセン氏病の人たちの詩集がありますよね。そういうものを読むといろいろなことを考えます。僕も以前岡山に行こうとしていたのですが、できませんでした。そういうところに行きたいなと思っています。なんの話をしていたんですって？

B：D さんの話に戻ると、キリスト教と「二度生まれ」についてですね。『イワン・イリッチの死』の本文にも、「聖体拝領」とあります。これはカトリックの聖餐式です。それを神父がしてくれるのですが、これも一つの象徴です。これを仏教的に解釈することも可能でしょうか。もともとの仏教では難しい気がします。大乘仏教では、このあと目が覚めると自分は蠅になっていて…といったように続くように思います。仏教でいう時間は、終わりなき連環なので、ここで光が指すと言う意味の死をもってくるのは難しい気がします。容赦ない死がそこにあります。そこには意味もないし感傷もないですよ。厳密な仏教では難しいような気がします。

A：痛みにとりつかれている精神性からの解放ということでは、仏教的な「解脱」としては読めないでしょうか。

D：「悟りを開く」とかそういうことですかね。

A：痛みという身体性については、むしろ仏教的な概念の方が倒置することができるかもしれないですね。

D：そうですね。

C：仏教だったら蠅になるかも、という話とつながりますが、病を抱えていく感じは、カフカ『変身』とも重なりますよね。

B：周りが気を遣っていることが嫌だ、といったあたりもそうですね。

A：転んだときの傷から、というのにも似ていますね。唯一、病気の名前がよくわかりませんでした。遊性腎臓病ってわかりませんでした。医療者としては…。

B：腎不全とかなのでしょうか。これだけ痛いから…。

A：がんだと思います。打ったのはあまり関係ない。部屋の中を華美に装飾します。使用人に任せればいいものを自分でやろうとする。ものに囚われているいわゆる「世人」の生き方です。そんなもの病気に関係ないんだけど、この物語の中では、その小さなきっかけからそうなると書いています。

C：Aさんがはじめから読み直すと、と言っていました。私も読み終えてからはじめに戻ってもう一度読みました。恐ろしいと思ったことがありました。イワンは光を得て、解放されたと言ったようなことでした。でも、イワンが死んだ後に、他の人たちはいわゆる「世人」的な生き方をしています。最初に書かれている、集まった人たちが考えたことは「地位」について、また「死んだのは俺じゃなくてあいつだと悦ぶ」ともあります。その辺の描写から、これは一人を主人公にした物語なんだけれど、このあと、別な世人が別に死んでいくんだと思いました。その連続を見るような気がして恐ろしく思いました。イワンの死から誰も学んでいないわけです。

B：映画の『マトリックス』みたいです。イワンはカプセルを飲んで終わったんですね。他の人たちは幻想世界に生き続けるわけです。

C：そんなぐるっと回るような感じがゾクゾクしました。

D：そんなドラマも時々ありますよね。あるおじいちゃんが亡くなるようにしているときに、親戚が争っているというような。現代にもつながる話ですね。

B：前半を読んでいて、病気になる前の生き様が丁寧に描かれているなと思いました。執拗に描かれています。出世ゲームとか家を建てるとか。それらを読みながら、既視感がありました。僕が公務員の時の同僚にこういう人がいました。公務員のステレオタイプってこういう人だと思います。結局40年後の給料まで計算できる世界ですから、そこにある興味は誰かよりも出世するとか、誰かより早く家を建てるとか、いい車を買うとか、それくらいしか人生の関心がなくなってくるのだと思います。イワンは公務員的な、世人の中でも世人的です。商売をしている人だとこうはならなくて、もっと実存に関わることがあるのだと思います。でもそれすら無いです。

C：職業的なことで言うと、裁判官というのが面白いと思いました。自分以外の人に対する「生殺与奪の権」があると書いていました。他の人たちが生きたり死んだりする権利を自分が持っているとあります。そういう職業としてイワンが描かれていて、でも自分の死に向かう過程では、自分のいのちが自分の手の届かないものになっていくわけです。職業がしっかりフリになっているんだなと思いました。

A：さっきBくんが言っていましたが、他の人よりもいい家をとか車をとか、そんなことを思いながら、それらを得た時がありますよね。家を整えるシーンです。そこで何を揃えているかが書いてあ

りますが「それはありふれたものだった」とあります。彼らは裕福なものに似せようとしているので、似通ってくる。でも彼自身にとっては何か特別なものに見えていた、と。本人は「自分が手に入れた」と思っている。でも結局は他の人と一緒です。ハイデガーの「世人」という概念そのままですね。

B：今の日本にもたくさんいますよね。「私らしく」とか「オンリーワン」という言葉が大好きなすごくありふれた人です。

A：結局見ているものが同じですからね。見ているものがオンリーワンという。

C：そんな部屋の整理をしていて、死に至るんですよ。

A：そうですね。転んだシーンの直後に、そういった「もの」について書かれているんです。世人であるイワン・イリッチの視点で描かれているところもあるんだけど、内部の声のような、第三者が世人から変わっていく様子を見ている視点も用いられています。それが少しずつ出てきています。その第三者の視線がおもしろいですね。

A：次回以降どうしますか。ロシア文学でも同じ文量のものもありますよね。ロシアから抜け出しますか？カレル・チャペックもいいですよ。

B：僕はカレル・チャペックを病気の時に教えてもらって読んでいました。『山椒魚戦争』が面白かったです。SFですが、山椒魚が人類と交雑をしてという話です。これがすごいのは、その山椒魚人間が人類を支配するんだけど、それはナチスのメタファーなんです。当時、ナチスをナチスとしてディスることはできなかったわけです。SFの中でしていたんですよ。カレル・チャペックは「ロボット」という言葉を作った人でもあります。

A：「ロボット」が書かれている作品が青空文庫にあります。『R.U.R』という作品です。これは戯曲です。これだと青空文庫で読めますから、どうでしょうか。もっとおすすめなのは『園芸家 12 カ月』です。カレル・チャペックのエッセーは素晴らしいです。

B：長さは穏当ですか？

A：ページ数はありますが、セリフなので読めると思います。

B：ロボットはチェコ語で労働という意味ですよ。

A：岩波文庫では『ロボット』とありますね。訳者が全然違いますが。

C：世界を旅しているみたいですね。

A：この次どこに行こうかということですね。

D：出てくる登場人物の名前が分かりやすいと嬉しいですね。

B：ロシア文学はあだ名とか出てきますからね。

A：誰がアリョーシャなんだ、となりますよね。

C：今回も私は紙に出てきた人を書きながら読みました。

D：えらい！

A：まじめですね。

B：ウクライナ人の友達がいるんですけど、聞いてみると、ロシアでは当たり前のように。ある一人に対して、男性が呼ぶあだ名、女性が呼ぶあだ名、親が呼ぶあだ名、それぞれ違うようです。みんなそうだから当たり前だと言っていました。関係性の中で名前が変わるのはアジア的です。西洋だとあり得ないですよ。近代個人主義だとです。関係性が名前を決めるというのはむしろアジア的で、ロシアがユーロアジアだというのもわかる気がします。アジアとヨーロッパのバランス位置にいる感じが

面白いです。

A：次はもう少し東に行けるといいですね。今回はチェコなので、中国とか読んだことのない国の本ありますよね。

D：私は三国志も読んだことありません。

B：今『三体』という本が出ていますよね。中国のSF作家が書いた本が売れています。買っただけで読んでいないのですが。

A：魯迅とかですかね。名前は知っていますが読んだことありません。短い作品もありそうです。でも漢字が多いですね。台湾はまだ青空にはなさそうですね。Cくん、旅するシリーズいいかもしれないですね。

B：「世界を旅する読書」ですね。

A：南米も気になります。『百年の孤独』ですね。キューバ文学もあります。

B：チェゲバラ自伝は面白かったですね。文学じゃないですが。

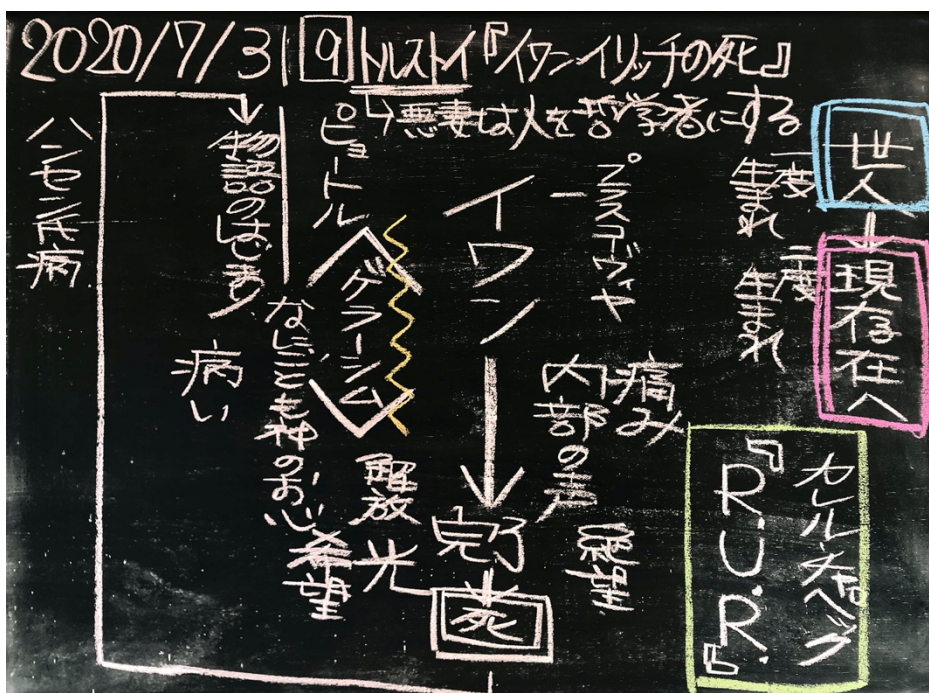
C：次回の日程、21日はどうですか。『山椒魚戦争』も話題になったので、読んでみると面白いかもしれませんね。私はチェコの思想的な背景を全然知りませんが読めるでしょうか。

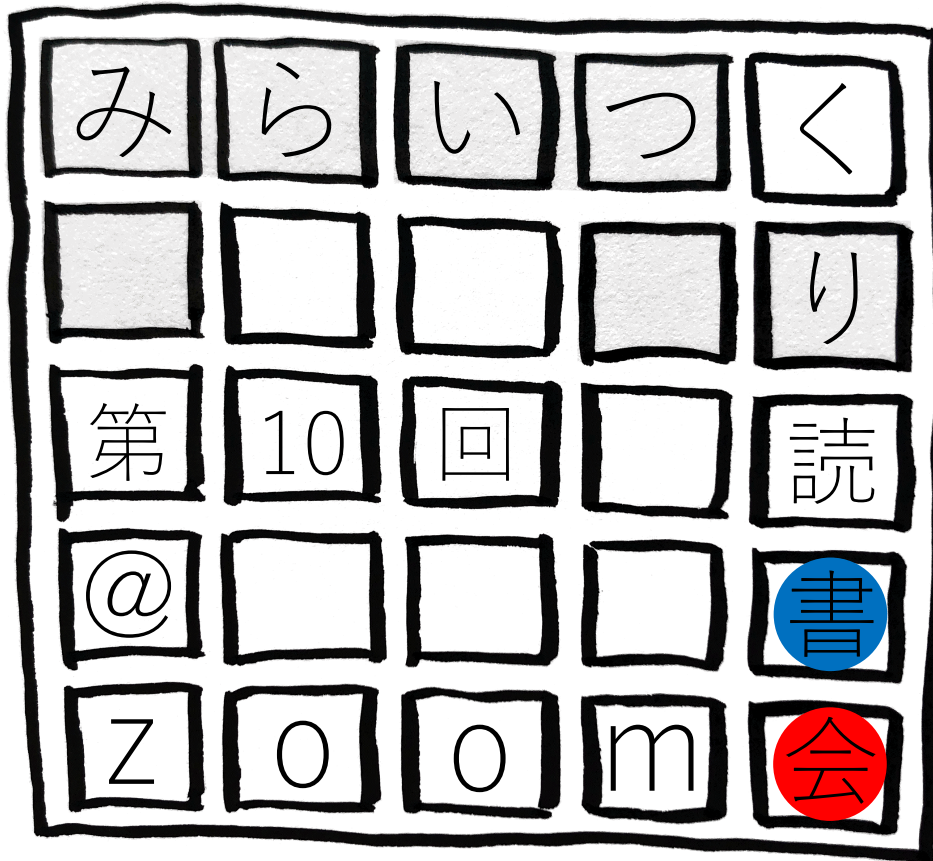
A：チェコはマサリクという哲学者が首相だった時期があります。哲人首相と言われていました。一時期チェコにはまって色々読みました。

B：バッチャという靴屋さんがすごく有名ですよ。バッタと書きます。佐藤優がチェコの神学者フロマートカを研究したくて、チェコ語を学ぼうと外交官になったといいます。よく佐藤優が言うのは、世界大戦前に多くの国がナチス化していく時に、チェコはかなり戦った側でした。戦うだけの基礎体力があったと。国家主義ということで、バッチャという製造業を首相が国策として守り、体力をつけていたからだと言っていました。機関産業の一つにバッチャという靴屋があります。インドやトルコで見たことがあります。

D：21日も難しかったです。19日はいかがですか？

C：では19日で行きましょう。10:00~11:00 お願いします。





課題図書を読んでお集まりください。

【日時】

2020年8月19日(水)10:00~11:00

【課題図書】

カレル・チャペック『ロボット』岩波文庫

※青空文庫で読む場合は、チャペックカレル『RURーロッサム世界ロボット研究所』を検索してください。

【参加方法】

興味のある方は、以下事務局までご連絡ください。

zoomのアドレスとパスワードを添付して返信いたします。

事務局：みらいつくり研究所 松井
Eメール：matsui-ka@kjnet.onmicrosoft.com

みらいつくり大学校企画

第10回みらいつくり読書会@zoom 記録

第11回は、2020/9/9の10:00~11:00に行います。興味のある方は下記事務局までご連絡ください。

事務局 みらいつくり研究所 松井

Eメール：matsui-ka@kjnet.onmicrosoft.com

【課題図書】	【実施日時】	【参加者】
カレル・チャペック『ロボット』	2020/8/19 10:00~11:00	A,B,C,D(+ラジオ参加2名)

内容（※語尾を中心に編集しています）

A：みなさんはどの本を読みましたか？

B：僕は岩波を図書館で借りました。

C：青空文庫です。

D：私は岩波を読みました。

A：おそらく全然違うようです。岩波はチェコ語からの訳です。青空文庫は英語からの訳です。青空文庫の最後には解説があります。「(青空文庫は)キリスト教色が削ぎ落とされている」とのことでした。

D：迷いましたが、岩波文庫版には最後に「ロボットという言葉はどのようにして生れたか」という文章がついていたのでそちらにしました。カレル・チャペックの童話集が置いてあったので読んでみたいと思っています。

A：「カレル・チャペック」という紅茶とはどのような関係なんでしょうか。

D：ちょっとわかりませんね。

D：早速始めます。私は戯曲を読むということが初めてでした。セリフだけなので難しさはありましたが、読み始めると最初に書いてある「登場人物について」に時々戻りながらではありましたが、スラスラと読めました。結論から言うととても面白かったです。「何を批判しようとしているのか」「最後のオチはどうなるんだ」と考えながら読みました。何を批判しているのかについては、資本主義的なもの、そして「物象化」をテーマとして描かれていると思いました。「人間は不十分な機械だ」というセリフがありました。それらは批判の視点だと思いました。最後のオチでは「愛」とあります。ここに関してはもう少し別な方法があったように思います。芥川だったら、トルストイだったら、もっと別な終末を描くだろうと思いました。おそらく、人間のもっとドロドロした部分を描くと思います。

A：ラジオ視聴している人もいるので「あらすじ」「概要」を伝える必要があるかもしれませんね。

D：難しいですが話します。必要であれば付け足してください。この本は演劇の台本で、序幕・第1幕・第2幕・第3幕と分かれています。最初は、ロボットの工場にある女性が訪ねてくるところから始まります。そのロボットの工場では、ロボットを大量生産しています。序幕が終わってから10年の歳月が経ち、1幕に入ります。そこからは「革命」がおきます。ロボットが人間を支配していきます。人間を取り囲んで殺そうとします。最後に、人間はひとりだけが残されます。でもその一人をロボットは殺しません。なぜかと言うと「生命を生み出すことはロボットにはできない」からです。その謎を解明してくれと、最後のひとりが残されるわけです。結局その謎はわからないのですが、最後の最後に、今までつくられたロボットの数人が、人間のようになる…ここの部分、解説が難しいですね。

A：解説が深かったり浅かったりで補足しにくいです。

D：ま、こういう感じですね。

A：青空文庫には「終幕」がありますね。呼び方が違うのでしょうか。岩波は序幕と1幕～3幕ですね。青空は3幕の後に終幕があります。区切り方が違うのでしょうか。

C：終幕ではアダムとイブについて触れられていますよね。感情をもったロボットたちが現れます。岩波も同じでしょうか。

D：そうですね。

A：青空文庫は第2幕を二つに分けているようですね。岩波でいうところの第3幕が、青空文庫では終幕となっています。そんな違いがありますね。青空文庫は5幕構成になっています。戯曲なのでどこで休みを取るか舞台転換をするかといった違いがあるのでしょうか。

D：2幕は会話が繰り返されていますからね。最後の部分ですが、人間らしい心のようなものをもったロボットが現れて最後ということですね。

A：青空文庫でいうところの終幕について、関係ない話かと思って読まずにいました。ヘレナという同じ名前の登場人物が出てくるので、新しい話かと思いました。最後に生き残っているのは誰ですか？

B：主な登場人物は、ドミンというRURロボット会社の社長、そして役員・研究者たちが5人、そしてヘレナという見学にきた令嬢のような人です。第1幕はドミンとヘレナの会話を中心です。2幕では役員会議のような場面があって、2幕の途中からロボットの反乱が始まります。3幕ではアルクビストという年老いた研究者だけが最後の人類となっている。出てくるヘレナというのは、令嬢に似せて作られた旧型のロボットです。僕は読みながら、これは最後にヘレナが生き残ったんだ、生き残ってアルクビストと新たな人類を始めるというオチを予想していました。そうではなかったので裏切られたのですが。

A：ヘレナは途中で死んでいますよね。

C：そうですね。

B：死んでいないパターンのおチなんだろうと思っていました。「ロボットのフリをしていたけれど、実は生きていたの」ということかかと思いましたが、そうはなりませんでした。

D：第1幕で女ロボットのヘレナが出てきますよね。

A：出てくるの？

D：ガル博士が作ったロボットです。

A：ヘレナが活着しているときに？

D：そうですね。

C：労働できないロボットですね。名前をヘレナとつけたと。

A：何でそんな名前にしたんだと最後に問うシーンがありますよね。

C：ガル博士のそばにいたから知らなかったのかなと思いました。お部屋に入れていたので。

A：時系列が難しかったですね。

D：感想からいきたいのですが、みなさんいかがですか？

C：「ウエストワールド」というドラマを知っていますか？アメリカのドラマです。Amazonプライムでも見られるはず。体験型アトラクションをつくってそこに本当の人造人間を配置するという設定です。そこにはお金を持っている人たちが入れます。普段は普通に暮らしていた人たちが、体験型ア

トーションとして犯罪も犯している世界をつくったというドラマです。そのドラマの中では、人造人間たちが感情をもって反乱を起こします。まさに似ていると思いました。第一部、第二部とあるのですが、第二部では頭を切り裂くなど気持ち悪いシーンが続くので見ることはできませんでした。この『ロボット』は100年前の作品とのことでしたが、今、AIなどロボットの反乱について考える人はたくさんいることを考えると、こういうことが実際に起きたら怖いなと思いました。人間が楽になることを考えすぎるとこうなるんだなと思いました。

B：僕は、これ以前にこういうタイプのSFがあったのかどうかは知らないけれど、その後のSFの要素が全てこの作品に詰まっている感じがしました。まずはマトリックスですね。そしてブレードランナーの「何が人間とロボットを分けるのか」という要素が含まれています。「労働がなくなった世界で人はどう生きるか」と言ったようなテーマもあります。それについてはSFでは思い浮かびませんが、ユバルノア・ハラリが論じているのは人間が超人類になっていくことです。労働がなくなった世界で、人間は株主とそうでない者2種類に分かれると。そして株主は人体を改造して行って、人類を超える存在になっていくと。それはもうすでにこの『ロボット』で描かれています。テーマが詰め込まれています。これを元ネタにして20世紀の様々なSFがつくられたという感じが面白かったです。AIやシンギュラリティという議論になって今もこれらが論じられ続けていることについても面白く感じました。読んでいた途中から、ドミンはジェフ・ベゾスと重なって思えてきました。AmazonのCEOです。ジェフ・ベゾスは、ベーシックインカム論の支持者でもあります。彼は自動運転の技術にも投資をしています。つまりAmazonというシステムを回す上で、人間がいつか必要なくなる未来を予測しています。それでも人がAmazonの商品を買い続けるためには、ベーシックインカムしかないというロジックなのでしょう。そういう世界という意味で、ドミンがベゾスに見えました。

A：以前にAmazonの倉庫に人がいない話をしていました。最近、AmazonのテレビCMをよく見ます。そのCMには人がいます。

C：そう。おじいちゃんが。

A：それは、人っぽさを前面に出そうとしているのかと思いました。子どもまで動員して、お父さんの仕事は～なんて話しています。あとは定年退職したであろうおじいちゃんも出てきます。そのおじいちゃんは「ここで働くことが生きがい」といったような話しをします。それらは、今話していたことがあるからでしょうか。ここには人はいますよ、といったようなメッセージです。

B：僕は『欲望の資本主義』が何かで読みました。あくまで米国のAmazonですが、倉庫には絶対にカメラは入れないそうです。それは、そこで過酷な労働が行われているからではなくて、そこに人がいないことについて、見た人がショックを受けるからだそうです。ジェフ・ベゾスの本音は、そこで働いているおじいちゃんもいなくなればいいなということだろうと思います。もちろん日本のAmazonでは働いている人はいるんだと思います。倉庫にも人がいるのでしょう。ただ、どうやってコストを下げているかという自動化とAIに他なりません。Amazonはこの世から労働をなくす方向に進み続けています。ドローン配達なんかもそうです。

A：青空文庫のあとがきには、原本はキリスト教的なものをベースとしていると書かれていますが、岩波文庫はそういったような書き方をされていますか？

B：そうですね。キリスト教的です。というのは、あとがきで読みましたが、それぞれの登場人物がヨーロッパの国を代表しているとのことでした。英国のファブリ、フランスのガル、ドイツのハレマイ

エル、ユダヤのブスマンといったようにです。『山椒魚戦争』もそうですが、カレル・チャペックは、当時第二次世界大戦前のヨーロッパの国際情勢を直接的に論じるとまずいので、フィクションとして風刺するという多重性を持たせているように思います。ドミンはラテン語の「主」だとあります。ラテン語で神を表す言葉です。おそらく、未来世界で神となろうとした人なのだろうと思います。チャペックはキリスト教徒でもありましたが、アルクビストはずっと預言者的に働いているわけです。労働とはこうだと、レンガを一つずつ積むんだと。彼の命が助かったのも、彼が労働から離れなかったからです。彼が労働から離れなかったから人間だと認識されずに死ななかったわけです。アルクビストはラテン語で「あるもの」からきているとのことでした。それは神の一つの名前です。おそらく、ドミンという神になろうとした男と、アルクビストといういわゆる神を代弁する人が対比されているのだろうと解説されています。

A：岩波版には最後の長いセリフがあります。1 ページにわたるものです。それが青空版では全削除されています。英語版のようですが、アメリカなどで上演されるときに、聖書を含む「いのちとは何か」といったようなセリフが無くなっているようです。

B：宗教色を排除した形で上演されたりもしたということなのではないでしょうか。

A：青空の解説によると、この作品の特徴的な記述が3つあると書かれています。一つ目は生命倫理の話、二つ目はロボットの奴隷制の話、三つ目は愛の話。英語版では生命倫理の話と愛の話に関する、キリスト教的な叙述は全てごっそり削除されている、とあります。これはなぜでしょうか。

B：なぜでしょう。

A：聖書の素養がないとわからないからでしょうか。簡単にしているのでしょうか。

B：昨今のアメリカならあり得ると思います。でも当時はそんな時代でもないですよ。

A：むしろ当時のアメリカなら強く表現しても良いくらいだと思います。「キリスト教的な禁忌に及ぶから」とありますね。逆にキリスト教を信じる人からすると、それらを風刺するようなセリフを受け入れがたいのでしょうか。

B：あるかもしれませんね。ある種、相対化して再解釈することを許さないということですね。

A：1920年代。テーマ的には、ニーチェの後です。ニーチェが1800年代後半に「神は死んだ」と言いました。ニーチェが言った神はここでいうキリスト教的な神ではなくて、人間が作りあげた偶像としての神です。人間はルネサンス以前中世の時代に本当の神を信仰していました。それからルネサンスという人間中心主義に至って近代科学が出来上がり、資本主義によって工場が造られます。その資本主義について研究したのがマルクスです。ニーチェは、人間が人間のつくった価値によって支配されていたということを「すでに神はいなくなった」と述べました。いわゆる超人ですよ。人がその立場にまで至らなければいけないというわけですよ。自分でつくった価値によって支配されるといったことを全て捨て去って超人にならねばならない、ということがニーチェの最終的な結論です。『ロボット』はそんな話ですよ。それらを、国を含めて風刺しているということでしょうか。最終的には人間が一人しかいないので、増えないですよ。

C：増えないですよ。

A：ヘレナもプリムスもロボットですもんね。

B：オチがいまいちしっくりこないのは、そこから生殖が始まるのかということだと思います。基本的には始まりません。なので、彼らが人間のようになってという話ではないと思います。だけど「彼らは

新しいアダムとイブになって」と書いているのはどういうことなのかわかりません。ロボットが愛するということを学んだ以上、もはやロボットではなく人間なのだというところまではわかります。ブレードランナーはそういった話です。人間らしいロボットは、ロボットと呼んでいいのだろうかという提起があります。人間には共感能力がどんどんなくなっていくけれども、ロボットは人間以上にセンチメンタルにもなるし人を思いやることができるとしたら、どちらがより人間的なのかというと、それはロボットです。最後の部分でそれを伝えているのかと思います。

A:『ロボット』の最後のセリフの後が、ブレードランナーで言う 2049 ですよ。ブレードランナーの元々の人もロボットだったんじゃないかという説がありますよね。結局ロボットではないですよ。ロボットとの間に子どもが生まれたわけではないですよ？ブレードランナーの話です。

B:僕はアンドロイドだったと解釈しています。木馬の夢というのもプログラムだったんです。自分が人間だということを担保するその記憶すらもプログラムだった。だから雪の中で泣いているんです。

A:ヘレナとプリムスの間に、仮に子どもロボットをつくったとしても、似た話になりますよね。それをわかりにくくするためにヘレナという同じ名前を出しているのでしょうか。アルクビストは人間だからいつか死にますよね。でもそのアルクビストが、ヘレナとプリムスに「生きなさい」と言います。神がかつて人に言ったという創造の時のように「産み増えよ、地を満たせ」と言います。そこにはもう人間はいないですよ。仮に生殖ではなく作って増えたとしてもです。つまり、おそらくチャベックは最後のアルクビストすら風刺しているのだと思います。あたかも最後に残された人間が神のように、かつて神が人間に言ったかのように、残されたロボットに「生きよ」と言います。「でも増えないんだ」という批判なのか、増えたとしてもそういうことではないということなのか。だから、やはり形而上学批判なんだと思いますね。技術もそうだけれど。今読んでいるからか、ハイデガーに行きつきますね。ハイデガーは労働については触れていませんが、全てのものを人間に役に立つような仕組みにしていることが、最終結論です。「総駆り立て体制」です。その極論が原子力であると。

D:前回のトルストイもそうでしたが、ハイデガーと結び付けながら読んでしまうことが面白いなと思っていました。人間と機械の区別についてですが、読んでいる途中に人間性というものを因数分解しているようだと思いました。何をもちて人間とするかということなのだと思います。人間と機械については、ハイデガー的にいうと、存在者としては、区別は無いはずですよ。そして、私たちは、重症心身障害者は現存在なのか、と考えるわけです。

A:『ロボット』に引き寄せて考えると、ロボットたちは現存在なのかということですよ。

B:人が働かなくなった時に人が子どもを産まなくなったというのは、面白いなと思いました。生物学的な論理としては繋がっておらず、なぜそうなったかは説明されていませんが。働かなくなった人は産まなくなるというのは、労働があるから人間だったんだと、「人間性とはいのちを生み出すことだ」という定義ですよ。この本の中では、新しい生命を産み出せるものが人間で、産み出せないものは人間ならぬものであるというのがこの本の中での図式です。そして人間が働かなくなった時に、人は産まなくなる。人間が労働から離れた時に、人間ではなくなるということをアルクビストが言っています。そのあたりの労働観、労働哲学といったものも僕には響きました。

A:チャベックの労働観は何をベースにしているのでしょうか。マルクスでしょうか。

B:『山椒魚戦争』は労働の話だったのでしょうか。

A:当時のチェコはどのような社会だったのでしょうか。社会主義でしょうか。

B：バッチャという国策によって国が保たれたのは、マサリクがいたからです。それがあったからチェコはナチスに完全には呑まれなかったんだと佐藤優が言っていました。自国の産業を築くことができたから、ナチスへの堤防になれたと。労働がもつ力というのはそういう意味かもしれませんね。意識していたと思います。

A：労働が国の基本であると考えたということですね。建国が1918年なんですね。最初は共和国ですね。ちょっとわかりません。

D：前に話題になった『園芸家12ヶ月』は、労働観についての話でしょうか。

A：『園芸家12ヶ月』は、園芸家が自宅ですら園芸を続け、ちょっとした社会風刺をするというものです。チャベックの『おかしな人たち』という本がありますが、ライトな社会風刺が書かれています。

D：園芸というような、手でものをつくり育てるということを重視するといったことではないのでしょうか。

A：きちっと自分でつくるといったことには多少触れていると思います。あまり覚えていませんね。

D：産むことについては「人が実を結ばない花になる」という印象的なフレーズがありました。ヘレナは何度もそうやって話します。

A：これはちょっと岩波も含めてもう一度読みたいですね。読み込めませんでした。残念です。

D：明かに「労働」はキーワードですね。チャベックが労働をどのように捉えていたのかについてわかるだけで、批判の大元がわかるはずですね。

B：ロボットがそもそもチェコ語の「労働」を意味しますもんね。労働をめぐる話なんですよ。21世紀的に考えると、それがシンギュラリティ論争と絡んできます。この本でいうロボットの反乱はシンギュラリティです。汎用AIが人間の知性を超えるということです。カーツ・ワイルという社会学者が2040年ごろに来ると言っています。僕は多分来ないと思っています。それは、人間の脳の複雑性をあまり考えていないからです。後100年200年は無理だと思います。だけど、かつて囲碁でコンピュータが人間に勝つことは無理だと言われていました。でも羽生善治だけが「多分2020年までにコンピュータが勝つだろう」と言っていたそうです。そして実際にそうになりました。それはエポックメイキングでした。チェスはいけても、囲碁は絶対無理だと言われていました。それは大きな一歩だったそうです。でも、それらが行き着いた時にマトリックス的な未来であるというのは、行き過ぎだと思います。技術の限界を見れていないと思います。だからといって、AIが破壊的なイノベーションではないという話にはなりません。確実に破壊的なイノベーションになります。特に自動運転関係とかは労働を確実に奪うでしょう。その辺は大切なテーマですね。新井紀子さんの『AI vs 教科書が読めない子どもたち』に引きつけると、その辺で教育が大切になってきます。なぜか知らないけれど、AI時代が来るから教育を変えなければいけないという旗振りをする経産省や文科省の偉い役人がやっているのは、むしろ人間の知性をAIに寄せるようなことだと言っています。読解力や深い読みではなくて、計算を早くしようとかプログラム教育をしようとしています。それらはAIが最も得意なことです。新井紀子さんはそれらのちぐはぐを指摘しました。AI時代に、人間がむしろAIに寄せてしまうということも、この『ロボット』の中に出てきています。人間は、本当はロボットと逆に振らなければいけないのに、むしろ人間がロボット化していく。産まなくなるというのはそういうことだと思います。今と重なるなと思いました。

D：主題とはズレると思ったので触れませんでした。序幕で興味深いセリフがありました。「教科書には何が書かれていないかご存知ですか」とあります。あと「教科書にあるのは金を払って出した広告と、馬鹿げたことばかりだ」ともありました。教育というテーマも陰にあるかもしれません。

A：経産省と教育の話ですが「Society5.0」と言われています。狩猟社会、農耕社会と進んでいって、今後新たな社会をつくるということです。それに全政策が向かっているとのことでした。それは自明の前提として動いているとのことでした。いわゆるリアルワールドとバーチャルワールドを組み合わせるということらしいです。経産省が中心なんだと思います。

B：内閣府のホームページで見られますね。でも経産省なんですね。

A：おそらく全ての政策のベースがここなんだと思います。一番怖かったのが、それを組み合わせて「人間中心の社会をつくる」ということです。まだ読み込んでいませんが、それらのことと比較して『ロボット』を読んだらいいと思いました。ニーチェやハイデガーも同じです。ハイデガーがもう 100 年前に言っていたでしょう、ということをもう一度取り上げますよね。原子力を人間中心の極地と言っていたはず。あれだけでも維持はできないということになったはずなのに、それを認めないまま、「人間中心」をさらにバーチャルワールドも組み合わせて進めるということなのです。

B：これはすごいですね。内閣府のホームページには、「Society 5.0 では、ビッグデータを踏まえた AI やロボットが今まで人間が行っていた作業や調整を代行・支援するため、日々の煩雑で不得手な作業などから解放され、誰もが快適で活力に満ちた質の高い生活を送ることができるようになります。」とあります。これはもはや RUR のドミンがつくった企業パンフレットを読んでいるかのようですね。もはや SF です。

A：確実にこれをベースに行っています。トヨタが富士山麓につくろうとしている街は、これらを先取りした話なんだと思います。

D：私が学校現場にいた一年前、現場にいても Society5.0 は聞こえていました。新指導要領の背景には、Society5.0 があるとされていました。超末端の私にすらそうやって聞こえていました。それは、疑いようもないこととなっていました。北大の宮崎先生は、Society5.0 について触れるところから批判を始めますよね。

B：昨今の経産省関連官僚の劣化具合がすごいとされています。今は首相官邸が強いですね。あの人たちは経産省で出世できなかった人たちです。だから各省庁のパワーバランス的には、財務省が最強の官僚でと言われます。外務省は憧れで、厚労省は予算を引っ張れるから強いが、文科省是最弱だと言われます。

A：最弱は環境省でしょうか。

B：そんな中で経産省は首相官邸とパイプをつくることによって、一気にパワーを得てきている。そして経産省の官僚がすることはことごとく変です。「GoTo キャンペーン」はまさにそうです。内部までは詳しくないのでわかりませんが、佐藤優が「若手の官僚に反知性主義を感じる」と言っていました。頭はとてもしっかりしています。ペーパーテストの結果で言ったら彼らにかなう人はいません。でもなぜ彼らが反知性主義かということ、彼らは古典を読まないんだと言っていました。古い本を読まない。基本的に踏まえておくべき西洋の知性の積み重なりがあります。ゲーテ、ニーチェ、ヘーゲル、ハイデガー。そういったことを踏まえずに、ハラリのような本でそれらの上澄みをすくって発想するんだけれど、そういうものに対してすでに 100 年前に批判が加えられているところまでは回らないということ

でした。

D：そろそろ時間ですね。最近は一人の作者、一つの作品で回していましたが、今の反知性主義の話もそうですし、Society5.0について考えるためにも、チャベックの労働観については、もう一段階踏み込んで考えたいですね。「労働」をテーマにしつつ、チャベックの別作品を読んでみるのはどうでしょうか？

A：労働に絞らなくても、チャベックに絞らなくてもいいですが、せっかく『ロボット』を読んだので、今出てきた Society5.0 などの現代的な背景をもっともう一度深めて考えると良いと思います。『山椒魚戦争』もそんな話ですか？

B：『山椒魚戦争』は政治がテーマですね。ナチスのメタファーなので。

A：『ロボット』のままにして、久しぶりに2回目をするのはどうでしょうか。当時これらが何を意味していて、今に何が当てはまるのかといったことを考えたいですね。

B：これ(Society5.0)を国が主導しているというのが異常ですよ。こういうのって、民間から出てくるものですよ。日本がちぐはぐなのは、国がこういうことを言っている割には、現場ではネポティズムとか縁故とか忖度とかいう寝技で物事が決まっていくわけですよ。こういう華々しい花火をあげておいて、現場では寝技という。

A：(Society5.0)は科学技術政策の話だから、多分、各界の人たちも入っているんだと思います。ああいうのに入る人たちって決まっていますよね。あまり僕も人のことは言えないですが。そういう人たちが目指す社会だから、国が上から降らせた話ではなく、こういう方向にいくと、よく言う「win-win」の関係なんですよ。科学技術とか、AIとか、その中に労働も入ってきますし、人間中心主義とか、そういったものを踏まえてもう一度『ロボット』を読み直したらどうかと思います。…。

B：『イワンの馬鹿』は「労働」でしたよね。手が汚れていない人は信用できないという話です。

A：1900年代初頭、スペイン風邪の後でしょうか、こういう話は多かったんでしょうね。たまたま青空文庫になっているものを読んでいるから多いのだと思います。私たちが扱っているのは100年前の著作が多いですよ。

D：では次も『ロボット』にしつつ、その周りの副読本のようなものを読むことにしましょうか。

C：そうだったらウエストワールドをぜひ観てですね。

A：そうなるとおそらくSFのほとんどが繋がってきますよね。ウエストワールドだけ観てもあれですよ。

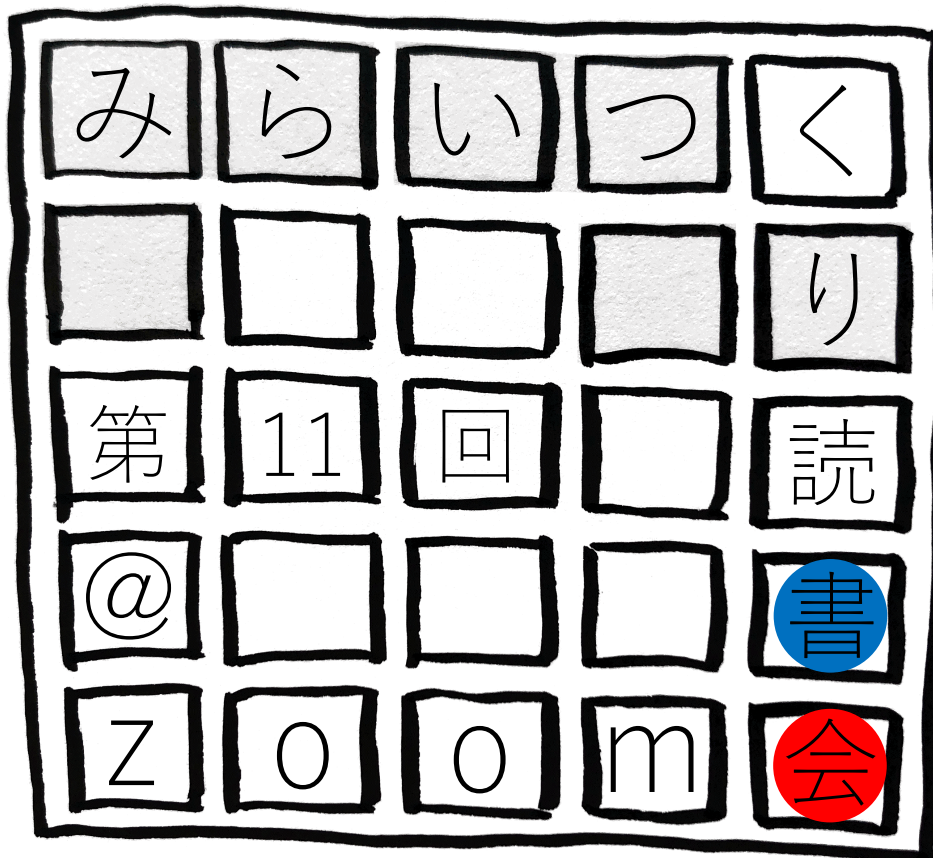
B：『アップロード』ってわかりますか？これも Amazon オリジナル作品で、VRの話だそうです。VRで、人間が好きな世界で好きなように過ごせるという世界を描いているようです。誰も現実に戻ってきたくないという話です。マトリックスの裏側なんだと思います。

A：AIとかロボットとかいうことよりも、そもそもなぜそれを作ろうとしていたのかとか、それを作って何を目指していたのかという方がよっぽど大事なんだと思います。

D：では何かしら副読本をあげて、それぞれが気になるものを読んでみて、『ロボット』でもう一回集まりましょうか。

A：それを扱ったようなものありますか？労働に関するものですね。

D：最近の新しいものを読むよりは、同年代の古典を読む方がいいかなと思います。『山椒魚戦争』は読んでみたいと思っています。



【日時】

2020年9月9日(水)10:00~11:00

【課題図書】

カレル・チャペック『ロボット』岩波文庫

※青空文庫で読む場合は、チャペックカレル『RURーロツサム世界ロボット研究所』を検索してください。

※第11回では第10回の内容を引き継いで『ロボット』に関する議論を行います。ぜひ前回の報告をご覧ください。

【参加方法】

興味のある方は、以下事務局までご連絡ください。

zoomのアドレスとパスワードを添付して返信いたします。

事務局：みらいつくり研究所 松井

Eメール：matsui-ka@kjnet.onmicrosoft.com

「ラジオ参加」も大歓迎！

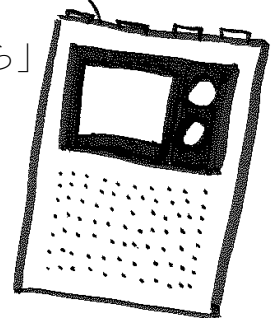
「ちょっと議論には加われない」「その時間は作業しているから」そんなみなさんにおすすめの「ラジオ参加」。

zoomのカメラをオフにして、ラジオみたいに聞き流す。

そんな「学び」があっていい。そんな「参加」があっていい。

興味のある方はぜひ事務局にお問い合わせください。

みらいつくり大学校企画



第 11 回みらいつくり読書会@zoom 記録

第 12 回は、2020/9/23 の 10:00~11:00 に行います。興味のある方は下記事務局までご連絡ください。

事務局 みらいつくり研究所 松井

E メール：matsui-ka@kjnet.onmicrosoft.com

【課題図書】	【実施日時】	【参加者】
カレル・チャペック『ロボット』	2020/9/9 10:00~11:00	A,B,C,D(+ラジオ参加3名)

内容（※語尾を中心に編集しています）

A：私は、カレルチャペックの『ひとつのポケットから出た話』『チェコスロヴァキアめぐり』を図書館でかりました。

B：チャペックの旅行本ってたくさんありますよね。

A：これを見ると、ものすごく穏やかな人だったんだなと思いました。『ロボット』と同じ作者なんだろうかと思いました。星新一はSFとして一括りできるような気がします。カレル・チャペックはいろいろな顔を持っているんだなと思いました。こないだの議論の中で、人間中心主義について話題になりました。(旅行本を読んで、)人間中心主義に至ることは不思議に思いました。『ロボット』の話とはずれますが、穏やかな人が狂気的なものも書くというのは、人間の二面性をあらわしていると思いました。『絶対製造工場』は読めませんでした。Google で色々レビューを見ました。人間が神の力をもつと余計なことにしか使わないとか、神がいたとしても争うだけだということが書かれていました。たしかにそうだなと思いつつ、人間が多様性に寛容でなくなる時は怖いときなんだなと考えました。皆さんの感想も楽しみにしています。

C：私は『北欧の旅』を読みました。これもAさんの言葉でいう「穏やかな」本でした。挿絵の使われ方も童話のようで楽しかったです。『園芸家 12 ヶ月』もとても面白かったです。安かったので中公文庫を買いました。図書館で借りたのが『マサリクとの対話』と『チャペック兄弟とその時代』です。

『マサリクとの対話』は途中までしか読めませんでした。『チャペック兄弟とその時代』は少しマニアックな本でした。日本チャペック兄弟協会という団体が刊行した論文集です。めちゃ面白かったです。

B：カレル・チャペックではなくて、その兄弟にそこまで関心を持っている集まりが日本にあるということなんですね。

D：兄弟は俳優でしたか？

B：いえ、ヨゼフ・チャペックは絵を描く人ですよ？

C：エッセイも書いています。強制収容所に入って亡くなったとありました。

B：ユダヤ人だったんですか？

C：ユダヤ人ではないはずですよ。ヨゼフの遺作は『強制収容所からの詩』です。まさに強制収容所の中で書いた詩を集めたものです。ただ日本語にはなっていないのだと思います。興味深く読みました。

B：自由と民主主義のために反ナチスのイラストを描き続けた、とありますね。

D：『山椒魚戦争』は反ナチスの文学作品ですよ。

B：『独裁者のブーツ：イラストは抵抗する』という本もありますね。

C：カレル・チャペックの方が日本で注目されているらしいのですが、でもヨゼフの方が芸術家として素晴らしいと書いている人もいました。

D：僕は『絶対製造工場』を読みました。僕は『絶対製造工場』と『いろいろな人たち』と『山椒魚戦争』と『ロボット』を読んだことになりました。面白さでいうと『山椒魚戦争』が一番だと思いました。

『絶対製造工場』はちょっと読みにくいです。構成が独特で、話者が変わっていきます。書き方の作法として人称が変わりすぎているように思います。最後まで読むといろいろな人の視点からこういったことを書きたかったんだというのがわかるのですが、読みにくいと思いました。まだ『ロボット』の方が読みやすかったです。内容はつまらないわけではなく面白かったです。原子力といったような話も出てきました。物質の重さをエネルギーに転換するというのは原子力に他なりません。そのエネルギーは、物質の中に閉じ込められた神を解き放つことによって得られるエネルギーだという説明がありました。その原子炉をいろいろなところで売りますが、原子炉があるところの近くに行くと、放射能を浴びるようにして、神を浴びてしまう。そうするとやたらに信心深くなってしまいます。それによって世界がどう変わったかということです。ユートピアではなくディストピアになるんだという話でした。面白かったです。カレル・チャペックは現代の作家で言うと村上春樹に一番似ているのではないかと思っています。『山椒魚戦争』においては全体主義批判ですし、『ロボット』『絶対製造工場』においては技術独占の批判をしたかったのだと思います。村上春樹は技術についてそこまで批判をしません、いわゆる全体主義やシステムといったもの、それが新興宗教のかたちを取ったり、戦前の日本軍の形を取ったりしていますが、村上春樹は、人間を疎外するシステムというものを批判し続けていると僕は思っています。それらは「小説において」と言えます。でありながら、村上春樹は抜群にエッセイがうまいです。僕の弟は「村上春樹の小説はさほど響かないけれどエッセイストとして群を抜いている」と言っていました。「エッセイストとして村上春樹が一番面白い」と言っていました。僕はエッセイもほとんど読んでいて小説もほとんど読んでいますが、その通りだと思います。エッセイになると思想性はほとんどゼロになります。チャペックもそうで、同じタイプの人なんだと思いました。けれど、その二つはつながっている気もしています。エッセイの中では村上春樹さんは「統制なきところにこそ思想がある」といったような、日常の、例えば「カキフライがうまい」ということを書くんだけど、その前提となるのは全体主義のない世界だと。そういうところにつながっているのではないかと思っています。日々と愛するということと、システムを批判することがつながっていると思っています。そのようなことを考えました。

B：僕は、先ほどDくんが言っていた『絶対製造工場』を読みました。僕はDくんとは違った観点で読みました。長かったので前半部分しかしっかりととは読めなくて、後半はざっと読みました。たしかに読みにくい。なかなか進まないです。僕は先ほどのDくんの説明とは違う解釈でした。エネルギーの話ありますよね。その話はスピノザの言う汎神論、全てのものには神が宿っていると言うようなことだと思いました。エネルギーを極限まで取り出すという仕組みとして、カルブラートルという原子力機関みたいなものを開発したという話です。物質の中に閉じ込められているエネルギーを普通のやり方だとちょっとしか取り出せないんだけど、極限まで、全て取り出せるという発想なんですよ。なので「エネルギー発生機関として優れている」という話です。その裏側で、全ての物質にエネルギーと神が宿っているんだとしたら、全部のエネルギーを取り出したら残るのは神だけであるという発想

があります。エネルギーを取り出すという人間の役に立つことを極限まで突き詰めると、残るのは神であるということ。神を生み出そうとしている機械ではないんだけど、エネルギーを産み出すことを極限まで突き詰めた結果、そこから神が漂ってしまうと言ったようなことです。いわゆる「絶対」と言う神が漂う。それをエネルギーに変換はできません。だから周りにただ漂うという話です。僕はとても面白いなと思いました。今、ハイデガー頭になっているのでそう考えているのかもしれませんが、原子力やエネルギーをどのように使うかということよりも、科学技術とかも主観性、人間の主観性といったことを考えました。つまり自分たちに役立つように周りの自然を支配していく。ハイデガー的というと「ゲシュテル」と言いますが、全てのものから駆り立てる。総駆り立て体制と言って、あらゆるものを人間に役立つように、ついには人間すら人間に役立つように、動員していくというようなことです。先ほどDくんが言っていた村上春樹が批判しているようなシステムというのは、人間にとって役立つような仕組みを人間たちが作っているわけだけど、それによってむしろ人間が支配されてしまうということです。主客転倒とかよく言われることです。ハイデガーやニーチェによると、人間の主観性を突き詰めて、その手段の一つとして技術があるとすると、その結果、神すら自分たちで作り上げてしまったと言えます。『絶対製造工場』においては、自分たちがつくったというよりは、副次的に出来上がってしまったんだけど、それによって戦争が起きる。『絶対製造工場』の後半はほとんど戦争の話ですよね。第二次世界大戦のような話です。びっくりするのは、これが書かれたのが第一次世界大戦後、第二次世界大戦前だということです。多少の年代の違いはあれ、1953年ごろまで戦争が続いたと書かれていますよね。そこには日本も少し出てきます。日本が北米に侵略したりしています。そんなことが書かれていて、予言めいています。そういったこともそうですし、先ほど言ったような人間の主観性を突き詰めた結果はこうなるよねといったことを見ようとしたという意味で、(カレル・チャペックは、)ハイデガーやニーチェと非常に近いのではないかと思います。『こまった人たち』は元々持っていましたが、『未来からの手紙』という作品が数日前に届きました。あと『カレル・チャペックの警告』という本もあります。この本をチラッと読んでみると、ハイデガー的な物言いをしているところがあります。「認識の精神と支配の精神」と1936年に書いています。それが完全に古代ギリシア哲学からの話で、「技術」は自然を支配しようとして人間がつくったものだと、そしてその中で人文科学の大切さについて書いているんですよ。きわめて現代的な、僕らが思う現代的なトピックを、もうすでに1930年代から扱っていたという意味ではすごいなと思いました。当時なら原子力だってそこまでは開発されていないはずですし。開発し始めたくらいでしょうか。ロボットやAIについてもそうかもしれませんが、100年後くらいのことを、予測しようとしていたわけではないけれども、すでに書いていたというのがびっくりだし面白いと思いました。『山椒魚戦争』はなんだか厚すぎてなかなかチャレンジできていませんが、D君の話聞いて、頑張って読まなければいけないなと思いました。

D：読みやすさでいうと一番読みやすかったですね。僕は。

B：セリフが多いみたいですよ。

D：プロットが直線的だからだと思います。『絶対製造工場』はプロットがトリッキーすぎますよね。読み慣れた頃に終わるような感じですよ。『山椒魚戦争』が僕は一番スツと読めましたね。そして面白かった。

B：『絶対製造工場』の主人公が、『山椒魚戦争』にも出てくるんですよ。会社の社長さんがユダヤ教か

ら改宗しているんですね。

A：『絶対製造工場』は最後どのようになるんですか？

B：最後はとりあえず戦争が終わって、日常的な感じに戻るんだけど、あまり変わってはいません。そこに神の概念があり、かつ見た目上は平和である。おそらく同じことを繰り返すんだろうなという感じはありますよね。

A：神は残るんですか？

B：その「絶対」というものが広がっていったのが、神の代わりになったんですけど、それがまだ地下に残っているんです。カルブラートルという原子力発電機関のようなものが、隠されているんです。人間たちが隠されているものを発見して壊していく。「おそらく、こないだ壊したのが最後だ」というような会話をしていますが、その前まで人間が神と呼んでいたようなものが残っているはずですよ。おそらくそれが原因となって争うんだろうなという気配を残して終わります。

C：『ロボット』と似てるんですね。

B：同じような感じですね。『ロボット』を描き終えた後にやっぱり取り組んじやったというのが『絶対製造工場』らしいです。ただこれを出した時には酷評されたようです。『バルザック』や『カラマーゾフの兄弟』と比較されたようです。新聞に掲載する作品でしたが、(カレル・チャペックの)長編小説はダメだと批判されたと書いてありました。

C：作品の終わり方についてですが、前回『ロボット』のあらすじを伝えようとして最後だけうまくいきませんでした。もう一度読み返してみても最後だけやはりパッとしないんです。何だったんだろうといったような感じで、モヤモヤします。

D：僕も最後よく覚えていません。チャペックって最後を綺麗に落とさないですよ。

B：あえてですよ。おそらく。

D：あえて、このディストピアと、われわれが生きている現代が地続きなんだということを、作品の落とし方で伝えたいんじゃないでしょうか。これはフィクションだと思って呼んでいたけれど、これは今の世界の話だ、となるような感じです。

C：その辺にも触れて論文を書いている人がいました。『ロボット』もユートピア文学の一つです。ユートピア文学としては『ロボット』ははじめではありません。『ロボット』には、それまでに書かれてきたユートピア文学の要素が断片的につめられていて、でもあえて結論を出さないというのが、チャペックの特徴ではないかと思って書いていました。だから最後モヤモヤなんだなと思いました。最後、子どもが生まれるのかもわかりませんよね。そしておそらくは生まれません。この物語はハッピーエンドなのか、といったことが問題になってきます。論理的に成り立っていないのではないかと、という問題があって、後半が削除されているというような背景があると書いていた人がいました。

B：訳による違いは、聖書的な記述があるかどうかの違いです。『絶対製造工場』を今回読んで思いましたが、やはり新旧約聖書、特に旧約聖書を読んでいると、ああこの記事かとなります。歴代誌・列王記のような記述があります。『ロボット』の最後も、創世記の素養があるかないかで分かってきます。素養がない人にもわかるような訳にしたのかなと思います。

C：私のつくった資料の中にもありますが、一つの論文の中に「ロボットの死に対する態度が変化している」とありました。もう一度そこに着目して読み返して表を作成してみました。確かに変わっていて、面白かったです。序幕では死について「知らない」と言います。「解剖されてもいい」と。でもそ

のうち、自殺願望のあるラディウスが出てきます。彼は自殺願望とともに「むしろ主人になりたい」と支配についての願望を述べます。二幕までにはそれが描かれています。最後、ラディウスがなぜアルクビストを生かしたのかについて触れる部分で「私たちは生きたかったのです」と書かれています。そしてダモンというロボットにアルクビストが「お前を解剖しよう」と言うと、ダモンは「俺を解剖しろ！」と言いながら辛そうに死んでいきます。ロボット全体を生かすために、自分は死にたくないけれど犠牲となって死んでいく、というようなことです。そして最後、ヘレナとプリムスがお互いにかばいあって「相手が死ぬなら私が死にます」と言います。その様子を見て、アルクビストが「アダムとイブになりなさい！」と言います。そこも面白かったです。

B：まさに現存在ですね。死に向き合っていますよね。

C：ロボットの死に対する態度が変化していることを通して人間を描きたい、ロボットについて描きたいわけではない、というようなことを、チャペック自身が他の本で書いているとありました。「人間が生きるということを描きたかった」と。

B：チャペックはそういったことが多いと書いてありますね。あとがきなどに。本来こうあるべきだということを否定するような内容です。人間がこうあるべきだというもの、ロボットがこうあるといったように描いて、だから本来人間性というのはこういうものだというような感じです。そういったことを書いて、読者に教える、大切さを伝えるといったような。「否定的な定式」だったのでしょうか。「否定による定式化」とありますね。例えば『絶対製造工場』についていうと、真理というものについて描きたかったとあります。それぞれの人のとって、それぞれの真理があつて、それぞれの神・価値があるじゃないですか。そんな色々な人がもつ真理ってバラバラなんだから価値なんてないじゃないかというのが、いわゆる「ニヒリズム」です。チャペックが言いたかったのは、そうではありません。「他の人が私のもつ真理を信ぜず、私の守神を尊敬せず、私の信じる全人類の利益のためには献身してくれのこと、と折り合いをつける可能性を、否定による定式化という意味で『絶対製造工場』で試みた」とあります。死に対する向き合い方も、ロボットが徐々に死に対して向き合っていく様子を描くことで、人間について書いたということでしょうか。

C：絶対主義の批判も含まれていますよね。真理は絶対ではなくて相対であるとチャペックは言いたかったとあります。時代的にも価値は揺らいでいます。価値観が揺らぎ崩壊しているような時代だったからこそ、色々な人の視点で書かれた作品が生まれたということです。「キュービズム的な文学である」とありました。

B：だから読みにくいんですね。そういう意味では、『山椒魚戦争』よりも『絶対製造工場』の方がチャペック的なのでしょうか。わかりにくいという意味では。

D：読書メモの検索をかけてみました。他にも『イギリス便り』というのと『未来からの手紙』というのを読んでいました。『園芸家 12 ヶ月』も読んでいました。『未来からの手紙』が相当面白いと当時の僕は言っています。これが一番直接的に作品の解説を加えているという意味で珍しいようです。ナショナリズムのことも書いています。「ナショナリズムというのは怒りと憎しみの口で、もしナショナリズムがなくなっても人々は階級間闘争や地域間闘争、宗教間のセクト闘争などに明け暮れるであろう」「問題はナショナリズムではなくて、闘う欲望なのだ」と指摘しています。物質主義についても触れています。彼は 1920 年代の時点で「物質主義は物質崇拜として批判されるが、その実は物質軽視なのではないか」という視点を述べています。「物質主義によって彫刻家はもう彫刻を大事にしなく

なり、陶芸家は壺を大事にしなくなり、人々はあらゆる道具を軽視している」「人は売ることと買うことしか考えていない」「もし神の力が私に与えられたら、人から金銭と言葉以外の全てを取り上げる」「人々は何に気づくだろう」と。「物質主義によってむしろ物質主義が軽視され、取引の道具でしかなくなってしまうと批判している」とメモしていました。『イギリス便り』も面白くて、イギリスを帝国として尊敬しながら、小国であるチェコを愛し、小さな船も大きな船も同じく価値ある未来や運命を持っていると主張するものです。チャペックの根底にあるものは、ナショナリズムと対比されるパトリオティズムであるように思います。愛国主義と訳せます。日本語にしてしまうと両方とも愛国心です。でも、ナショナリズムはより「国粋主義」「国家主義」なんだけれども、パトリオティズムは「郷土愛」のように、その国の文化を愛するというようなことです。『園芸 12 ヶ月』も「この土地」というものにこだわっています。そういうものを愛しています。そういうものを、国家主義・ナショナリズムというものがむしろダメにしてしまうんだという危機感がチャペックにはあったのではないかと思います。

B：ナショナリズムでいう「国」という抽象的なものではなくて、「その土地」というような具体性の高いもの、ローカリズムという言葉があるのかわかりませんが、そういうものを大事にする思想ということですよ。絵空事のような「国家」ではないということですよ。

D：そうだと思います。当時の僕は『未来からの手紙』を読んだ後に総評して「彼は 100 年先駆けた多元主義者・相対主義者なんではないか」と述べています。ずいぶん前のことなので、僕のメモでありながら他人事のようにして読んでいますが、『絶対製造工場』もそうですよね。「相対主義」というか、「相対主義なんだけれども信仰心はある」というようなことです。そんな気がしました。

B：「相対主義」というより「多元主義」といった方が近いんでしょうね。

D：そうですね。「多元主義」ですね。

B：『未来からの手紙』には日本についても書いてあります。チャペックは日本にも旅行したらしく「がっかりした」とあります。チャペックに日本を紹介した「カマクラさん」という人がいるようです。その人が、色々日本のことを説明したらしいです。いわゆる天皇の話をしたようです。「帝と呼ばれていて」とかいう話です。それもある意味で抽象的な話ですよ。そういうことを皆が微笑みながら皆同じように説明するからがっかりしたと。チャペックが本当に日本に期待していたのは、何か特別な芸術、木彫り・芸者といったものが発見できるのではないかとしたことだったようです。ローカル性というか、土地固有のものといったものを重視していたのに、ヨーロッパとあまり変わらず、多少新しいことはありながらもほぼ同じと感じたということだと思います。多分、抽象的な「帝」というものを信仰している人がいるというのは、他の国と変わらないんだなと思ったんですね。アイヌ民族とかをみたら、また違ったのかもしれませんが。紹介する人によって全然違うでしょうから。固有性といったものを追求したということなら、やはりハイデガーと同じことを言っていますよね。平仮名で言うところの「ひと」ではなく、その人固有の「開かれ」と言うものでしょうか。

D：『絶対製造工場』で僕が唯一メモをしたのは終盤のくだりです。ポンティと誰かの会話です。ウルリッヒ・ベックが『〈私〉だけの神』という本を書いています。21 世紀に宗教はどこに行ったのか、という本です。宗教の世俗化が起きていて、大文字の〈宗教〉は、クリスチャニティとかイスラムとかそういうことだけではなく、ある人にとってはスマホの承認欲求が神となり、ある人にとっては AKB48 が神となるというあり方を含めると、宗教は消えていないんだということです。現代社会はますます

神が個人化していると言っています。ここで書かれている「半径 2 メートルの神」というのはそういうことで、そういった神のあり方が、まるで全世界の神を総合した神のあり方であると思ひ込むことの中に破局があるんだよと言っています。カレル・チャペックはそういうことを言いたいのだと思います。インドのヒンズー教のあり方も似ています。確かベックも言及してはいたはずですが。ヒンズー教は神が一千万います。一千万種類の中からどれを選んでもいいんです。ポケモンとか妖怪ウォッチのような感じです。どれでもいいんです。それを力車の運転手だったら車のコックピットにその神様を置いて、毎日お香をたきながら運転するんです。そういうあり方なんです。ポイントは何かというと、その一千万の神々が絶対に排他的ではないんです。それは日本に妖怪と似ています。その感じというのはチャペックが批判するところの、絶対製造工場の「絶対」とは違います。それは人々が部分を所有しているんだけど、それが全部だと思ひ込んでいないという点で違っていています。アジア的な価値相対主義というのか、そういうものを西洋も学ばなければいけないんだ、とチャペックは気づいていたのかなと思ひました。

B：日本の八百万の神とかヒンズー教の一千万の神というのは、ある程度同じですか？

D：僕はある程度違うと思ひています。日本の八百万の神は、この地域のこの岩というふうに決めますよね。地域共同体のむしろ同調圧力の道具にされたりしています。祭りに参加しないと村八分にされるとかそういうことです。でも、インドの一千万の神の場合は、そういうものとも全然違っていています。

B：ローカリティが無いんですね。

D：ローカリティが無いんです。もちろんその地域でこの神が人気だとかそういう傾向はあるんです。傾向としては、でもそれが、世間というものをつくる道具とはされていないということです。

B：日本のように神それぞれのエピソードがあるんですか？

D：ありますね。

B：でも地方性が無いんですね。例えば日本だと、この地域には昔こんなものがいて、こうしてこうしたから祀っている、崇めている、というのがありますよね。

D：僕はそのまではわかりません。バイシャ・シュードラ・シヴァ、という創造神・維持する神・破壊神がありますよね。オウム真理教は破壊神シヴァを拝んでいたわけですが。これに関しては大きな物語があります。全宇宙の創生の物語です。シヴァは破壊神でもあり創造神でもあるから円環になります。時間が無限に繰り返すわけですが。それよりも下位の神がどんな役割を果たしたのかということ、『バガヴァッド・ギーター』に書かれています。でも体系化はされていないはずですが。それらが一つの体系をまとっているかはわかりませんが、抽象度でいうとローカル性というよりは全世界の創造主に位置づけられます。だからこの地域のこの場所をつくったとかではありません。この州では、伝統的にガネーシャのお祭りが開かれるから、ガネーシャを信じる人が多いよとかはあるんです。

B：半分プロ野球みたいですね。

D：そうかもしれないですね。

C：チャペックの宗教としては明確なものがあつたんでしょうか。

B：キリスト教プロテスタントなんだろうと勝手に思っていました。

D：だけれど、プロテスタントの中のシステム性、排他的で我々こそが正しいのであるという姿勢に関しては強い鋭い批判の眼差しを向けていたと思ひます。そういうプロテスタントだったと思ひます。

B：その辺もハイデガーに近いような気がするんですね。ハイデガーも、最後まで信仰は捨てていな

くて、途中カトリックからプロテスタントに改宗しています。お葬式は本人の希望でキリスト教式で行っています。でもキリスト教的なシステムに関して、キリスト教的なシステムというよりはパウロ神学に関しては批判的ではあります。カトリシズムのようなものに違和感をもっていたのだと思います。チャベックは聖書をベースに書いていますよね。そういったことが随所に見られます。『山椒魚戦争』もそうですか？

D：そうですね。聖書の引用があったはずですが。でも『山椒魚戦争』は純粋なSFとして面白かったです。アメリカってチャベックのファンが多いようです。確か『未来からの手紙』のあとがきに書いてあって、アメリカにはチャベコマニアという言葉があるそうです。そのくらい人気があるようです。

A：ハルキストみたいですね。

D：確かに、カート・ヴォネガット・ジュニアとかアメリカのSF作家はチャベックを思わせるところがあると言われたらそう感じますね。

B：ブレードランナーの元ネタになった著者はアメリカ人でしたか？

D：アンドロイドのやつですよね。フィリップ・ディック。

B：アメリカ人ですよね。

D：多分だけれど、フィリップ・ディックの『アンドロイドは電気羊の夢を見るか？』は相当にチャベックの『ロボット』とテーマが似ています。チャベックは後のアメリカのSFに影響を与えたんじゃないかなと思います。

B：ジョージ・オーウェルとかも影響を受けているのでしょうか。

D：『1984』ですね。

B：なんでそんな人がチェコから生まれたんだらうということですよ。

D：そうですね。チェコはヨーゼフ・フロマートカという神学者がいます。佐藤優が心酔しています。

B：チャベックはパリのソルボンヌ大学に留学していたんですね。「そこでゲルマン学を学び～」とあります。不思議ですね。『絶対製造工場』の最後で世界戦争になりますよね。その戦争させている「絶対」なるものに戦いを挑む国が出てきます。それがフランスなんですよ。ナポレオンみたいな人が登場して、フランスでは「絶対」なんてものを信仰するな、と言うんです。フランスを無宗教にするんだと言います。フランスはその後そういうライシテという政策をとりますよね。キリスト教の人が多いけれど、国家と宗教を完全に分けるという政策です。国家としては無宗教・無神論的です。政策がいつだったかわかりませんが、『絶対製造工場』のなかで「絶対」に戦いを挑む人たちとしてフランス人を登場させるなんてめちゃ面白いと思います。日本も少し出てきますよね。当時第一次世界大戦の戦勝国だったので、チェコからみると、東洋の小さな国がやたらに強くなっているらしいという程度の感覚だったのかもしれない。でも実際に来てみてがっかりしたんですよ。

C：結論はないままですが「多元主義的」というか、多元主義に対置される絶対主義のようなものを疑っていったのではないかという話になんとなくなりました。次回の作品と時間を決めたいと思いますがいかがでしょうか。

B：そろそろチャベックから抜け出ないといいませんか。

A：ラジオ参加の方からおすすめの作品はありませんか？

B：短編というと実は少ないですよ。ロシア系が多いです。少なくとも岩波文庫は多くなくて、そして青空文庫に含まれているとなるとさらに少なくなりますね。最近、本屋に行くとそういった短編を

見るようにして、薄くていけそうかなというもの、かつ今まで行ってない国を選ぶようになっています。読書会のことを考えながら本屋で回っています。そんな習慣がつかしました。アンデルセン、ヘッセ…。アフリカ文学もあります。『やし酒飲み』です。池澤夏樹さんが世界文学全集を出していて、その中にも入っているアフリカ文学です。そして最後が魯迅の『阿Q正伝』ですね。この本の名前を中学校の国語の副読本でみて以来覚えていました。中身を見てみると、もうコントなんですよね。ドリフみたいな感じです。阿Qという人が主人公ですが、どうでもいい人なんです。ダメな人。その人についての正伝を書いているんです。阿Qがいかにダメなやつかということを書いているんだけど、そのやりとりが面白いです。辮髪ってありますよね。路上で戦うんだけど、その辮髪を掴んで壁にガリガリやるとか。全部読んでみてもなぜそんなに評価されたのかわからないんですよね。

C：魯迅だと『故郷』もありますね。『狂人日記』も。

B：それを加えてその三つが代表作なんだけど、『阿Q正伝』が一番有名のようです。魯迅は、中国のモダニスト、近代作家と呼ばれていて、日本でいうところの夏目漱石のような扱いのようです。でも『阿Q正伝』を読んでも何がモダニストなのかわかりませんでした。

C：中国は一つの大きな山ですよ。

A：もうちょっとまだ西に行きませんか。アジアに行ったらおしまいな気がします。

B：なんでおしまいなんですか。

A：ちょっとずつ西に向かって行きたいなと思います。

B：アフリカはどうですか？

A：アフリカだと通り越しているような気がします。フランスのちょっと手前はどうか？ドイツとか。

D：ジョージ・オーウェルとかはだめですか？

B：ジョージ・オーウェルは青空にはないですよ。そして長くないでしょうか。

D：『動物農場』とか『1984』もそんなに長くないような気がします。

B：ジョージ・オーウェルはイギリスですよ。

D：イギリスですね。

B：ヘッセなんかは短くて良いですよ。『漂泊の魂』です。

D：『東方巡礼』ですよ。

C：私はその本読みたいと思っていました。

D：苦労して読みました。全集を借りました。

C：ヘッセで有名なのは『漂泊の魂』ですか？

B：有名なのは『車輪の下』ですよ。

A：聞いたことがあります。

B：青空文庫にも…。ヘッセはドイツでしょうか。

A：ちょうどいいですね。

B：チェコから少ししか西に行ってません。

A：ちょっとずつ行きましょう。

C：私はどれも読んだことはありません。

B：『漂泊の魂』は手に入れやすいと思いますよ。本屋にもすぐ補充されると思います。

C: では『漂泊の魂』にしましょうか。

B: そのうち『やし酒飲み』も行きたいです。

D: 『やし酒飲み』面白そうですね。でも青空はないんですね。

B: アフリカの文体はすごいらしいです。そのアフリカの文体をそのまま生かした訳なので「ですます体」と「である体」が混合しています。

C: 読みにくそうですね。

B: 本人が書いたあとがきもそのように合わせているらしいです。アフリカ文学ってなかなかないので、そのうちもう少し西に進んだら行きましょうか。

D: まだユーロが残っていますからね。

A: ユーロが終わった後に行きましょう。

C: だいぶ時間かかりそうですね。

B: 『漂泊の魂』という表題のものと、『クヌルフ』というものがあります。3種類くらい訳が出ているはずですよ。

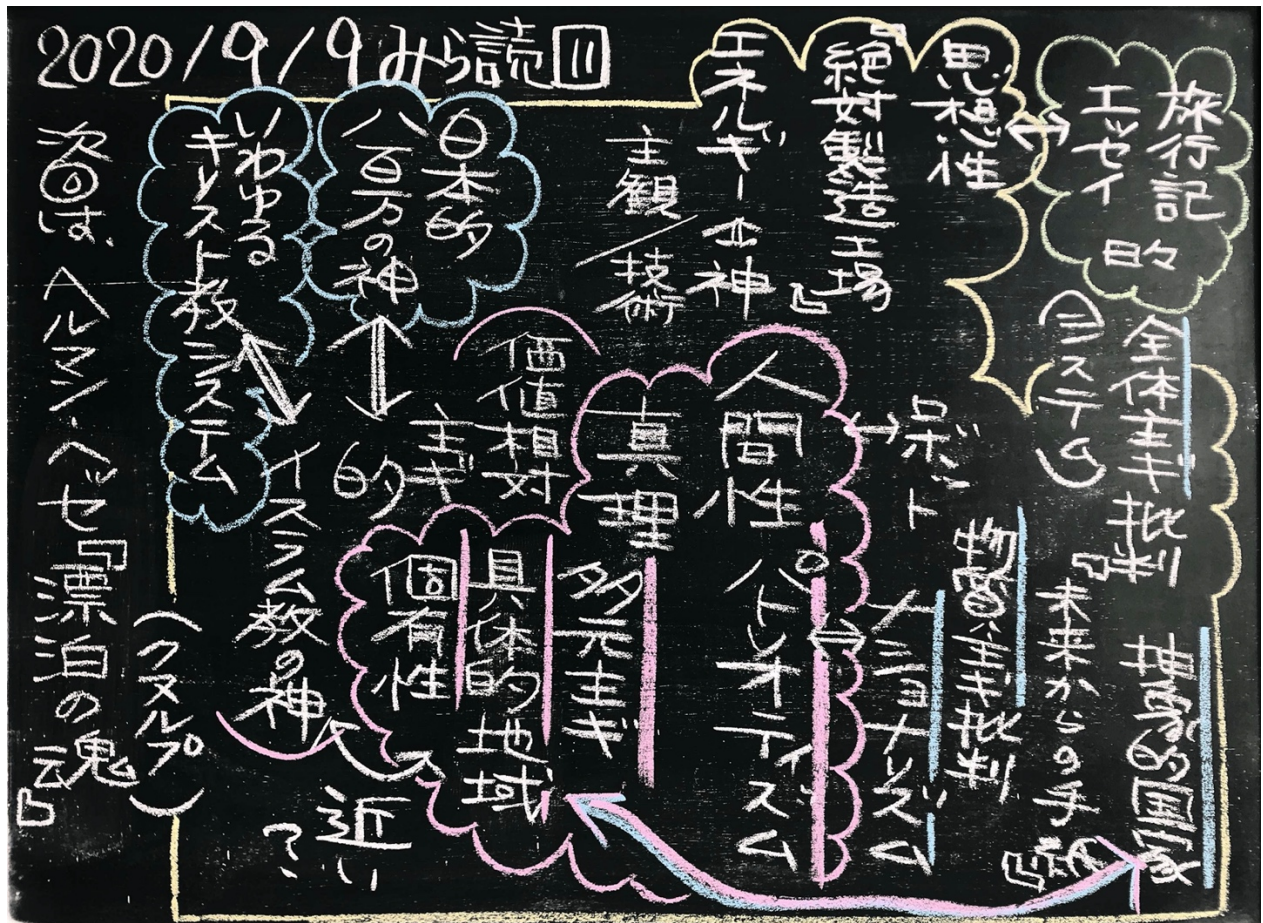
C: ヘッセはドイツ生まれだけれどスイスの作家だと書いてありますね。

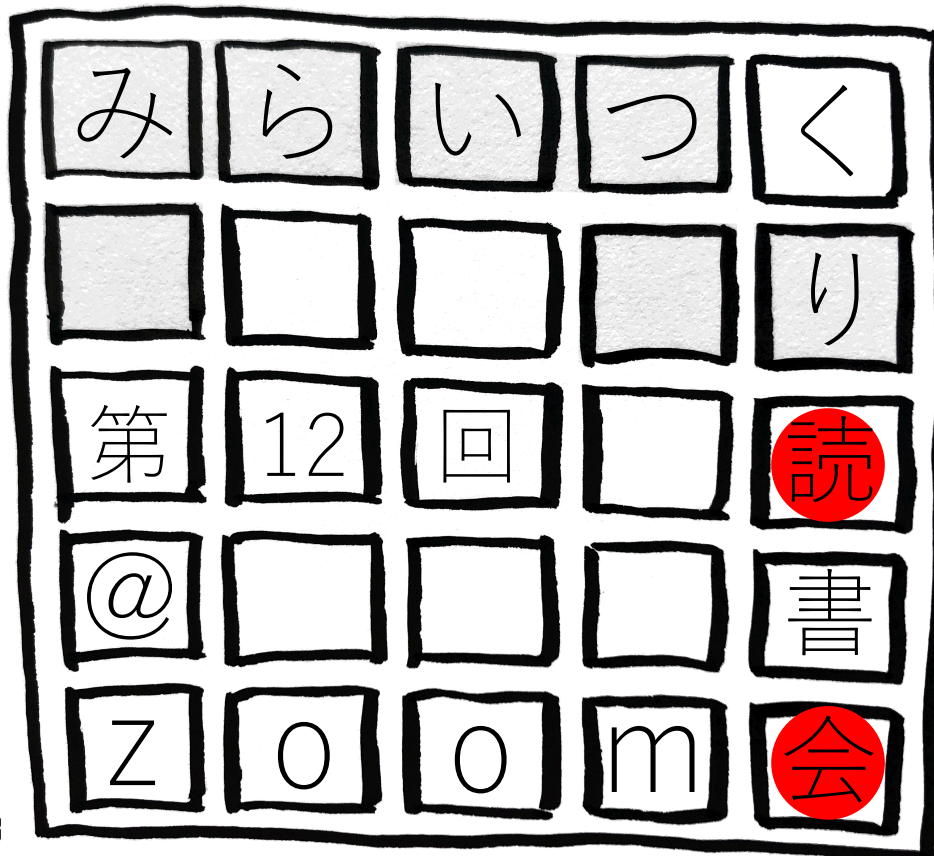
A: ちょうどいいですね。土地的にも。

C: では、ヘッセを読みましょう。『漂泊の魂』は1915年に書かれているようなので、年代的にはいい感じですね。

B: 漢字多めですよ。

C: 日にちは、23日水曜日10時でお願いします。





【日時】

2020年9月23日(水)10:00~11:00

【課題図書】

ヘルマン・ヘッセ『漂泊の魂』岩波文庫
 ※岩波文庫以外の図書を用いてくださっても構いません。

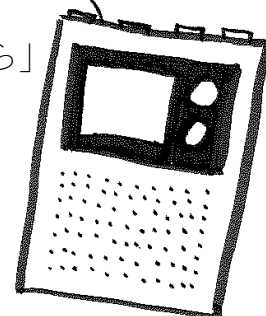
【参加方法】

興味のある方は、以下事務局までご連絡ください。
 zoomのアドレスとパスワードを添付して返信いたします。

事務局：みらいつくり研究所 松井
 Eメール：matsui-ka@kjnet.onmicrosoft.com

「ラジオ参加」も大歓迎！

「ちょっと議論には加われない」「その時間は作業しているから」
 そんなみなさんにおすすめの「ラジオ参加」。
 zoomのカメラをオフにして、ラジオみたいに聞き流す。
 そんな「学び」があっていい。そんな「参加」があっていい。
 興味のある方はぜひ事務局にお問い合わせください。



みらいつくり大学校企画

第12回みらいつくり読書会@zoom 記録

第13回は、2020/10/8の16:00~17:00に行います。興味のある方は下記事務局までご連絡ください。

事務局 みらいつくり研究所 松井

Eメール：matsui-ka@kjnet.onmicrosoft.com

【課題図書】	【実施日時】	【参加者】
ヘルマン・ヘッセ『漂泊の魂』	2020/9/23 10:00~11:00	A,B,C,D(+ラジオ参加1名)

内容（※語尾を中心に編集しています）

A：寅さんかなと思いました。イケメンの寅さんだと思いました。寅さんってこんなに複数の女性に想いを寄せられることはないですよね。この時代にもこうやって放浪する人がいたんだなと思いました。最後は神様とお話をしながら静かに終わります。自分に素直に生きるとこういう感じなんだなと思いました。クヌルプは、何のしがらみもなく自由に生きている人なんだと思いました。食べたい時に食べて、出ていきたい時に出ていく。人間関係の煩わしさも無い。でも孤独を最後に感じるということは、人間はしがらみとか煩わしさとか面倒くささとか、そういうことがあったとしても、必ずしも孤独ではないんだなと思いました。夫婦関係もそうだし、親子関係もそうだけれど、「なんて面倒くさいんだ」とか「鬱陶しいな」と思うことがあるけれど、それは孤独ではないんだなと考えました。一人じゃない。自分のどんな姿を見せても結局はそばに居ることができる。居続けることができる。それって貴重だし安心だと思いました。自由に生きるということは、孤独と隣り合わせなんだと思いました。結論は「寅さん」ということですね。

B：私は、しがらみという意味では、クヌルプはむしろしがらみの中にあるような気がして読みました。過去にすごく引きずられている。作品全体としては、季節の描写が綺麗だと思いました。『東方への旅』も早く読みたいなと思いました。春・夏・秋・冬と季節が並べられていて、人生とも重ねられていました。だから夏には青春時代のことが書かれているんだろうと思います。そんな描き方も面白いなと思いました。旅人であるクヌルプと定職についている人たちが比較されながら物語は進んでいきます。そしてクヌルプは最後には神と語ります。自分の人生の意味とは何だったのかと語るわけです。旅人であった自分の人生の意味を語ります。人生を通して、自由とは何か、美しさとは何か、といったことを世の中に示すということが目的だったと思います。それらには感動をしました。

C：Aさんが「寅さん」と言っていて、確かにと思いました。寅さんって、トリックスターですよね。トリックスターという言葉はユングが言ったんでしたっけ？システムの外で生きることでシステムを相対化するという、物語をつくる時の一つの役割を担う人のことです。クヌルプはトリックスターという意味で、寅さんと共通しているなと思いました。トリックスターというものが最後に肯定されるというところに、この物語の救済があると思うんです。ヘッセの他の作品では『デミアン』『荒野の狼』を読んでいます。基本的にはヘルマン・ヘッセは病んだ人の話が多いです。病んだ人の病の中から、illnessの中から出てくる真実を病んだ人に語らせるということを、ヘッセは一つの手法として持っています。このクヌルプはシステムの中で生きられない人を肯定するという役割を担っていると思いました。

D: 僕はクヌルプの人生が肯定されて終わったとはそんなに思わないまま読み終えました。むしろクヌルプが抱えた、最後に自覚することになった「後悔」といったものの方が、強く伝わってきました。若い頃の失恋、そこから全てが変わってしまう、そういう話でした。元々与えられていた容姿や能力、一言で言うなら器用さだと思いますが、それらのものでクヌルプは飄々と生きていけたと思います。たくさんの人に好かれ、時には人妻からも好かれて、もてなされることを繰り返していました。しかし最後に「あの時に自分が壊れてしまった」と振り返るんです。死ぬ直前に肯定されたとしても、クヌルプの人生が美しく幸せなものであったかと言われると、よっぽど作中に出てきた職人たちの方が幸せに見えました。いわゆるクヌルプとは違う容姿で違う生活を送っている職人たちです。クヌルプのような存在に憧れつつも、そうではない人生を日々歩んでいる人たちが、よっぽど幸せに見えました。だからクヌルプが神に肯定されたとしても、そんな役割を背負わされてしまっている人の悲しさのようなものを感じて読み終えました。描写はすごかったです。訳によって違うのかもしれませんが、新潮文庫の方がよく売れているのかもしれませんが、いくつか他にも訳が出ているようですし、季節の美しさもそうですし、表現が難しいですが、「官能的」というのでしょうか、そのような美しさを感じました。

B: 私は、クヌルプと対比されている職人たちの生活を見て、トルストイが見たら、そちら側の肩をもつだろうなと思いました。『イワンの馬鹿』に描かれるイワンはクヌルプと全然違います。クヌルプの手はごつごつしていないだろうと思うので、トルストイの世界では食事につくのは一番最後だと思いました。

A: 私は女性目線でクヌルプを見ていました。なぜ男性にとってクヌルプが信頼され、心を許してもらえるのが不思議でした。ふらっと来たクヌルプに「よく来たね」「何日いてもいいんだ」「お酒を飲もう」「君といると楽しい」と声をかけます。そういう職人たちがたくさん出てきました。何でそこまでクヌルプは魅力的だったのだろうと思いました。女性目線ではわかる気がします。歌がうまくて手はごつごつしていない、容姿は綺麗で表現は上品。女性が惹かれることはなんとなくわかるのですが、男性からなぜこんなに信頼を寄せられているのかわかりませんでした。男性目線で文章の中からクヌルプの魅力は感じられましたか？

D: あまり男性目線とか意識をして読んだことがないのでわかりませんが、おそらく、自分とは違うからではないでしょうか。自分にはできないことをしている人を好きになる傾向にあるのではないのでしょうか。男性はそんな傾向が特にあるのかもしれませんが、何かに縛られていると思っている人が多い中で、クヌルプのように漂泊して旅をしながら生きる人の話を聞きたいという気持ちはあるのかなと思います。

B: 女性から見て器用なところはモテるんだろうなと思います。女性から見ても、また友人から見ても、「危うさ」のような部分も、人から好かれる理由の一つかなと思いました。いつも自然の中に身を置いて、孤独であろうとする生き方です。「放って置けない」という言葉は適切ではないかもしれませんが、そんな部分も友人から好かれる理由の一つかもしれないと思いました。

C: 芸人の人で、おごられることを職業にしている人がいます。「プロ奢ラレーヤ」と言います。所持金はいつも50円くらいです。SNSでご飯を食べに行きますというと、奢りたい先輩やお金持ちが話しかけてきて、それで何年も生きていくという人です。宿にできる家もたくさんある。まさにトリックスターです。彼が定職をもっているとそんなことは起きません。彼がそんなやつだから話のネタにも

なるし、家にも泊める。そんな人がいます。水曜日のダウンタウンでキングコングの西野が紹介をしていました。寅さんもある種そういう人です。あの音楽に騙されているけれど、家族にあんな人がいたとしたら深刻な問題です。

B：確かにそうですね。

C：変なおもちゃを売り歩いて。でも、それが「救済」になっているということです。今のコロナの中で「エンターテイメントって結局必要ない商売だったんだ」とマツコデラックスが言っている記事を読みました。「私たちの職業なんていかにいい加減なものかわかったわ」と言っていたようです。その感覚もわかりますよね。エンターテイメントは無くても生きられるものです。でも、無いと、人生は殺伐としてくることも事実ですよね。作家もどこか似ています。小説はなくても生きていけるけれど、小説があることで、世の中は変わります。作家は、人の余剰品を生み出しています。自分の作家としての社会での立ち位置と、このクヌルプを重ねている部分もあるのかなと思いました。

A：そう聞くと、テレビのような感覚なのかもしれません。クヌルプは、歩くテレビのようにして、いろいろな土地のことを教えてくれます。

B：各地の話をもっている、というのも寅さんと似ているのかもしれません。

C：『男はつらいよ お帰り 寅さん』があります。山田洋次監督が、デジタルリマスターでつくった映画です。あれを観たんです。Amazon で。久しぶりに吉岡秀隆を見たくなかったです。僕は『北の国から』の大ファンですから。あの人の声とかが大好きなんです。寅さんがいないので、メインは吉岡さんです。当然、寅さんはデジタルリマスターの思い出としてしか出てきません。とらやの人たちが、深刻な問題に直面するたびに「こんな時に寅さんがいたらなあ」と話しています。「寅さん」というある種のフィクションがあることによって、システムの中のデッドロック状態を揉み解すことができます。ビートたけししか誰かが「エンターテイメントは社会のマッサージ師だ」というようなことを話していました。世俗の悩みによって筋肉が凝り固まります。「エンターテイメントはそれを緩める、そのくらの役割なんだよ」と言っていました。なるほどなと思ったことがありました。

D：映画自体は面白かったですか？

C：映画自体はさほどでした。よっぽどの思い入れのある人がみるファン映画です。映画として期待はあまりしていませんでした。イメージビデオですよ。

D：不在の存在を引き立てねばならないという目的があって作られていますよね。『おかえり寅さん』ですよ。『おかえりクヌルプ』があったとしたら絶対に面白くはなりませんよね。

C：寅さんって「昭和」なんですよ。昭和の間に終わったんですか？ 渥美清が亡くなったのは昭和の終わりか平成の始まりだったはずですよ。それで作られなくなりました。僕は「平成は寅さんがいなくなった 30 年である」と分析ができるとしています。平成はどんどんと細かくなってきた時代です。ツッコミも細かくなりました。人の気にするところが細かくなりました。ポストモダン的な差異を強調するところがありました。社会の遊びがなくなったことがありました。ちょっとミスしたら炎上をします。「昭和ノスタルジー」というものの一つの主要構成要素は「いいかげんさ」だと僕は思っています。人が「昭和ってよかったね」という言葉を使う時に「昭和」が意味していることは「いいかげんさ」だと思っています。テキトーだったわけです。昭和プロレスとかも、放送が試合の途中でバツンと終わってしまうことがありました。放送時間だからという理由で終わってしまい、みんなが結果を知らないということがありました。そのようなことが成立していました。「マスクマンの正体をバ

らす」なんてことが、いいかげんな中でやり続けられていました。そんなことの象徴が、寅さんにあるような気がしています。平成に寅さんがいなかったのは必然で、平成以降の感覚だと、寅さんなんていうのはけしからんわけです。不快になる。「嫌な気持ちになりました」とコメントが殺到するかもしれません。「私たちはこんな生活に汲々としているのに、なんなんですか！」と言われてしまう。「あんなおもちゃを高値で売って!」「女性を振り回して!」「あの女性は寅さんのために婚約を破棄したんですよ!」ということになります。そんなことはどうでもよかったのが昭和で、そういうことを懐かしむのが「昭和ノスタルジー」だと思います。寅さんは社会を揉み解す人なのかなと思っています。

D: 同じようなことを深夜番組でマツコデラックスが言っていました。『月曜日から夜更かし』という番組でした。あの番組には、街中のヤバい人たちが出てきます。100 回未満しか再生されていない Youtuber とかを取り上げています。やはりヤバいです。確かに、昭和ってそういう人たちが公に目にされる場にいたような気がします。今、昭和のテレビを見るとヤバいですよね。だいぶ放送できない部分があると思います。

C: 本当にヤバいのがたくさんありますよね。

D: 今、Youtube ではそういうものがたくさんあります。それらは公共の電波に流れてはいません。先ほど言っていた「細かくなった」というのは、そういう形で分断されていて、みんなが同じように同じヤバいものを見るということが少ないということなのではないでしょうか。ヤバい人がいなくなったのではありません。かつてよりは容易に Youtube には出られるようになっています。世界中が見ることができるところです。マツコデラックスは、昔のテレビって怖いもの見たさというか「ヤバいもの見てしまった」というようなことがあったけれど今はそんなことがなくなった、ということを書いたかっただかなと思います。今も深夜放送ならそういうことがあるのかもしれませんがね。

C: 無菌的なものになっていますよね。

D: 自分で女装をしているおじさんの動画が出てきていました。特に何もありません。50 代半ばくらいのおじさんが、ただいろいろな角度から水着を着ている自分を撮っていました。

A: 嫌だー。

C: 面白そうですね。

D: 「これを誰に伝えたいのですか」と聞かれた時に、おじさんは「自分で観るためです」と答えていました。自分で観るためのものを、世界中の人たちが見られる場で作ることができるようになった時代と言えると思います。そういう存在は、かつて今もいるけれど、目にする場がなくなったのかもしれませんが。そういえば、昔は親戚の集まりとかでも「あのおっさんいつもいるけどなんだろう」と思う人がいました。

C: あるかもしれません。学校の先生にも手が震えている人がいました。「あれはアルコール依存症の禁断症状なんだ」と他の先生が教えてくれて、僕は「ああそうなんですね」と答えました。「そうなんですね」という話ではなかったような気がします。

D: 社会生活はできていたということですよ。あの人どうやって生きているんだろうと思う人も、別に支援の対象ではありませんでした。

C: 平成はそれが炎上するんですよ。

...

B: こないだ、私は初めて「川口浩探検隊」を初めて見ました。「昭和のエンタメといえば」と語られ

ていたのを見てみました。

B：ヘッセは、そういった「平成的なもの」、「システム」や「細かさ」といったことを批判したかったのでしょうか。

D：僕はそんな目的は感じませんでした。単純に描写をしていったということなのかなと思いました。ロシア文学などとは明らかに違うものだと思います。死の描き方についてもそう思いました。

C：『東方巡礼』もトリックスターの話ですよ。『デミアン』は不思議な作品です。主人公の友人、デミアンという男の話です。その人が「神の中にある悪」というのを論じるという話です。それってユングが言ったことです。ユングは四位一体と言いました。キリスト教の父子聖霊に悪を加えて「四位一体の全体性」と言ったのでキリスト教界から排除されました。ヘッセは、社会を当たり前構成している秩序、そんなものを相対化するというテーマは共通しているのかなと思います。

B：キリスト教なんだけれど、東方思想の影響をかなり受けていて、西方の思想には批判的であると何かで読みました。

D：心理学や自己分析への関心を持ち、その後、東方思想へ傾倒していくとありますね。

C：西洋を構成する「正しさ観」のようなものがあります。「正しさ」というものに揺さぶりをかけていくということをした人なのかなと思います。

D：やはり同じドイツのニーチェの影響が大きいのでしょうか。

C：ニーチェの影響は大きいのではないかと思います。

D：当時の知識人はそうなのでしょうね。少し後ですよ。

B：そういえば、私、国語便覧を買ったんです。

D：おおー。懐かしいですね。札幌市の小学校で使っているやつですか？

B：高校で使っているものを Amazon で買いました。コストパフォーマンスの良い本だと思います。その中に、少しだけヘッセが載っています。ここにヘッセは反ナチスの運動も行っていたとあります。でも『漂泊の魂』からは反ナチの思想のようなものは感じませんでした。

D：そうですね。

B：キリスト教やシステムといったものを批判したと言われると、確かにそうかもしれないという気はしました。

D：あるでしょうか。むしろクヌルプはそういうものに傾倒していないキャラクターだけれど、最後に死ぬ直前に神に会うという話ですよ。私は、死ぬ直前に会話の相手として出てくる神について、キリスト教的な神の雰囲気を感じませんでした。読んでいて「聖書のこの箇所ね」というような部分もあまりなかったように思います。

B：最後に出てくる神について、私はむしろとても「西洋的」だと思いました。もうすでに答えを知っていて、「あなたの人生はこれです」とドンと答えを提示する神です。悩んでいるクヌルプに対して答えを突きつける神です。そんな神観があるのかなと思いました。

D：過分にそのような使命を負わされているような感じがあるように思います。イエスもそうですね。使命を帯びて降りてきたわけですよ。クヌルプをイエス的に扱っているわけではありませんが、神は「お前がやっていることの中に神である私が出たんだ」という話をします。神は「そちの中に潜っていた私が～」と話しています。

C：最後の部分を読んで、僕はヨブ記っぽいかなと思いました。最後にあるクヌルプと神との対話は、自

分の人生に不満を申し立てる人と神との対話です。そのような意味でヨブ記だと思いました。

D：クヌルプの人生はそんな不安や苦難に満ちていたかというところではないですね。

C：表面はそうなんですけれど、クヌルプは思春期に失恋を経験してから、「生ける屍」でした。そういう主観があったわけです。人生をダメにしたんだと思いつけています。ある種、退廃的な生き方です。「どうとでもなれ」と思っています。器用だったりラッキーだったりしたので食いつなぐことはできたけれど、いつ死んでも良いというような生き方をしていました。その時から諦めているんだけれども、その全てが最後に肯定されるという「救済」なんだろうと思いました。フラれたことによって、彼は人間とか社会そのものを信用できなくなりました。だから信用できない社会に信用される必要もないという形で自暴自棄・退廃的になっていきました。ただ、そのフラれるということも含めて、ちゃんと意味があったんだという肯定なのかなと僕は読みました。

B：職人たちには自分たちにはできないことへの憧れがあったと話題になりました。クヌルプに対する気持ちです。でもクヌルプは選ぶことができたわけではなくて、クヌルプにとって「こうするしかなかったこと」の連続だったと私は思っています。旅人としての生き方を選んだというより、そう生きざるを得なかったのだと思います。その結果を最後に肯定してもらおう。そんな感じがしています。

C：彼の悲劇は、何にもコミットできないということだと思えます。コミットしそうになると逃げてしまします。それを繰り返している人生です。それは悲劇ですね。

D：クヌルプ自身が「もっと違ったものにコミットする人生だってあったらこうに」と最後に悔やむわけです。でも神が「それに満足しなさい」と言います。

C：どうなのでしょう。

D：結構ストレートに言っていると思います。最後に回心したということなのか、それともただそれまでの人生を肯定して終わったということなのか、その辺はわかりませんでした。神が「さあ満足するが良い」と言っています。不思議な神の語りかけだなと思います。神の目線の中にクヌルプ的な生き方があったという話ですね。さっきの寅さんの話ではないけれど、そういう人もいたって良いということです。みんながみんな勤勉に家庭をもつわけではないと。

C：多様性という点も違うかもしれません。ドイツという国柄もあると思っています。これがイタリアだったら違ったと思います。イタリアだと、クヌルプ率ももっと高いです。イタリアでは「人生は、太陽をみて、踊って、おいしいワインを飲んで、楽しむものなのさ」というある種の国民性があります。スペインもそうかもしれません。でも特に北のヨーロッパ、プロテスタントのカルバン主義は違います。カルバン主義は突き詰めると「快楽は罪」というところまで行きます。初期のアメリカはカルバン主義の影響が強すぎて、妻とのセックスも子どもをもうける時以外は禁止するとかいうことがありました。それは快楽にあたるからです。イギリスの食事がまずいのもその影響であると言われていて、食事を楽しむなんていうのは、この世の放縦であるとされました。食事というのは栄養を取るためにそして働くためにあるんだということまでいったわけです。ドイツはそのようなカルバニズムの震源地なので、すごく社会規範というものによって人々ががんじがらめにされているという文脈があると思っています。そんな中でクヌルプという人には肯定の余地は一切ありません。軽蔑の対象でしかありません。そのようにしてのたれ死んだ人を、最後に肯定する神の優しさという包摂を描いているのかなと思いました。

B：そのような意味で、職人たちは誠実であり、ただ働いているのかもしれないね。

D：コミットメントの話でいうと「選択する」ということなのだとすれば、クヌルプが選択してそうになったのか、むしろ神の選びによってそうになったのかということが大切なと思います。クヌルプだって勤勉に働くことができたはずだけど、クヌルプが選ばなかったのか、それとも「お前の生き方はそうではなかったんだ」と神に選ばれていたということなのか。社会全体で見ると、クヌルプのような人もいて良いという包摂の捉え方もあると思います。でもクヌルプ自身は後悔をしていますよね。最後に説得されて「満足しました」と言っていますが、私は、クヌルプの後悔のような部分が強く出ているような気がします。

C：クヌルプ的なトリックスターの生き方をする人って、やはりドイツのような封建的な禁欲的な社会では罪責感と伴う以外には生き方はないと言えると思います。生きづらさを感じずには生きられないという社会です。だから、それすら神の必然であって、ということはあるのかなと思います。日本もどちらかというとドイツ寄りだから、寅さんだって、寅さんであっても、「わかっちゃいるんだ、妹よ」と言います。寅さんも「わかっちゃいる」んですよね。人に自慢できない兄だということもわかっている。その罪責感込みのトリックスターなんですよ。そしてそれを包摂するという構造になっているのかなと思います。

D：観点は違いますが、三部構成になっていますよね。第一部「早春」がクヌルプ視点で、第三部「終焉」もクヌルプ目線でしたか？

B：私は「早春」と「終焉」は誰か客観的な語り手が話していると思いました。

D：2 番目の「クヌルプへの追憶」では、クヌルプが完全なる客観として出てきますよね。

B：それは友達が語っているんですよ。

D：そうですね。そして第一部と第三部はクヌルプの主観じゃないんですか？主観ではないけれど、第二部と視点は違いますよね。しかも第二部はクヌルプが死んだ後の話ですよ。クヌルプが死ぬのは第三部で、第二部にクヌルプが死んだ後にされた追憶が書かれています。なぜこのような構成にしたのでしょうか。

B：そこについては私も気になっている部分でした。第一部では 20 代から 30 代くらいのクヌルプの姿が描かれています。病にありつつ生きる姿です。第二部では、友人がもう死んだクヌルプを思い出しているけれど、思い出している内容は、クヌルプが青春時代の 10 代の頃の話です。そして第三部は、クヌルプが死ぬところですよ。いれ違っていますよね。

D：第二部の「クヌルプへの追憶」の必然性はどこにあるのだろうかと思いました。何を狙ったのでしょうか。

B：私が思ったのは、季節は順繰り進んでいます。春・夏・秋冬というようにです。季節と人生を重ねているのかなと思いました。

D：第二部が最後ではいけなかったということですね。季節が違えば最後でも良かったということでしょうか。

B：夏に十代の青春時代のことを書きたかったのではないかと思うんです。

D：他の人の目線です。私はクヌルプの目線で描きたかったというよりは、クヌルプの友達の目線を描きたかったのかなと思いました。だから「おかえり寅さん」が間に挟まっていることになりそうですよね。

B：真ん中は「おかえり寅さん」ですよ。

D：そして第二部で語るこの友達はクヌルプにずっと影響を受け続けていますよね。この友達もずっと孤独だと言っています。この人はクヌルプのような生き方をしていないんだと思います。第二部の語り手はどんな人なんでしたっけ？

B：この人のことはあまり出てこなかったように思います。

D：この人は最後に「あの日から孤独の影は消え失せようとしなさい」と言っています。

B：クヌルプが話していた美しさとか自由といったものに対する思い入れがあって、そのことを中心に回想しているように思います。

D：クヌルプに憧れを抱いていた友達ですよ。何なんでしょうね。クヌルプの若い頃の話を入れたかっただけなのでしょう。

C：死の部分を最後にもっていきかかったのも一つだと思います。そして、クヌルプがどのように他の人生に爪痕を残したのかという語りを入れるということではないでしょうか。

D：第二部のクヌルプは、クヌルプ自身の目線でいうと人生を捨てる前ですよ。第一部はすでに捨てた後の話です。そして第三部はその最後です。

B：普通だったら、第二部の内容から始めても良いですよ。

D：そうですね。

B：逆に第二部が最後にきても良いです。

C：そうですね。

D：何でこの順番にしたんでしょうね。そこが興味ありますね。

B：謎ですね。

...

D：今までと全然違う、ドイツ的な感じだから良かったなと思いました。

D：次の作品を考える前に、こういう本が出ました。チャベックの『白い病』です。9月15日、つまり先週に発売されました。

C：新たに訳されたんですか？

D：そうです。しかもコロナを受けてです。あらすじを言ったからといって面白くならないと思います。ペストはいわゆる黒死病と言います。それを逆にして「白い病」といいます。肌に白斑が出て、それがどんどん広まっていき、身体が大理石のようになるという病です。大理石のようになった身体の部分が、次々と壊れ落ちていくという病気です。その病気には45歳以上じゃないとわからない。しかも中国から出てきた病気です。中国というのはいろいろな病気が生まれてくるんだと1936年ごろに書いています。それが世界のパンデミックを起こします。仮想のドイツで起きる話です。ヒトラーのような元帥が出てきます。その人も病気になってしまいます。面白いのは、治療法を発見した一人の医者が出てきます。治療法を発見するのですが、自分しかその秘密を知らないんです。いろいろな人が治療してくれと集まってくるのですが、その医者は貧しい人しか治療しないんです。金持ちを治療しないんです。どうしたら金持ちを治療するかというと、その条件は「戦争を止めることを決めてくれ」というものです。金持ちは力があるんだから、国に戦争を放棄するように言ってくれと伝えます。途中で武器を開発する会社の社長が出てきて、この人もその病気になります。それでも、誰も止められないんです。戦争をここでは止められないと。元帥もここで戦争をやめたら国民に何と言われるかわからないから止められない。そして最後病気になる。そんな話です。クライマックスがさらにすごいので、

ぜひ読んでみてください。

C：Kindle にはないですね。文庫で買わないといけませんね。

D：最初は訳を公開していたようです。

C：全集には『白い病気』というタイトルであるんですね。でも今訳されたものを読みたいですね。

D：今回訳されたものが、今っぽくて、つまりコロナの時代らしいんです。普通にパンデミックという言葉が使われています。パラレルになっています。クライマックスの作り方がとても面白いです。

B：まさかチャペックに戻りますか？

D：それはないけれど、ぜひ読んでください。

B：次はどうしましょうかね。

D：長いけれど『星の王子様』はどうですか？まだ読めていないんです。全く読めないんです。モチベーションがわきません。

B：いくつか訳が出ているはずですよ。

D：青空文庫にもありますが、全然タイトルが違うんです。『あのときの王子くん』というタイトルです。なんか急に「怪物くん」みたいですね。読んだ人いますか？

C：僕は一回読んでいる気がします。

B：私読んだことがあります。僕が学校の教員になるといったときに、友人のお父さんがこれを読んでおいたらいよいよ勧めてくれました。それで読みました。こういうことを伝えたいのかなと考えたのを覚えています。

D：おそらく今読むとまた違うんですよ。

B：そうかもしれないですね。

C：わりとよく引用されますよね。

D：映画『こんな夜更けにバナナかよ』の前田監督が好きみたいです。サインするときに必ず「大切なことは目に見えない」と書くんです。読んだことないので、前田監督の言葉だと勝手に思っていました。

C：サン・テグジュペリ、いいんじゃないですか。この人はフランスですよ。

B：フランス文学に行きますか。

D：そこにいった後に『やし酒飲み』に行きましょう。

B：私も『やし酒飲み』楽しみにしています。

D：そしてチャペックに戻るのもいいかもしれません。

B：チェコを起点に回っていますね。

D：『星の王子様』は長いですよ。

C：長いでしょうか。童話だから…。

D：でも2時間とありますね。

B：では次は『星の王子様』にしましょうか。

D：青空文庫だと『あのときの王子くん』ですね。

A：わかりました。

D：だからBくん、告知にはカッコして『あのときの王子くん』も加えてください。

C：Kindle だと150円で買えますね。

D: 一番有名なのは新潮文庫でしょうか。装丁もいろいろありますね。集英社文庫は池澤夏樹さんが訳をしています。

B: これはとても読みやすいと思いますよ。

A: 今見ると結構厚さがありますね。

B: 童話だから絵もたくさんあって読みやすいと思います。

C: 絵もあって字もひらがなだから読みやすいかもしれないですね。

D: ではこれで行きましょう。アフリカに向けて。

B: 日程はどうでしょうか。

D: 木曜日は講師のお願いに行くんですよね。「キリスト教からみた死生学」というのを講義してもらう予定です。仏教はAさんが檀家さんの日蓮宗の方をお願いしました。

C: 死生学って何ですか？

D: みらいつくり大学の講義企画で、死とか生について、各宗教でどのように言われているのかをシリーズ化したいんです。本当はユダヤ教やイスラムもやりたかったのですが、知り合いがないので、とりあえず仏教とキリスト教をやろうと思っています。

B: 8日はどうでしょうか。

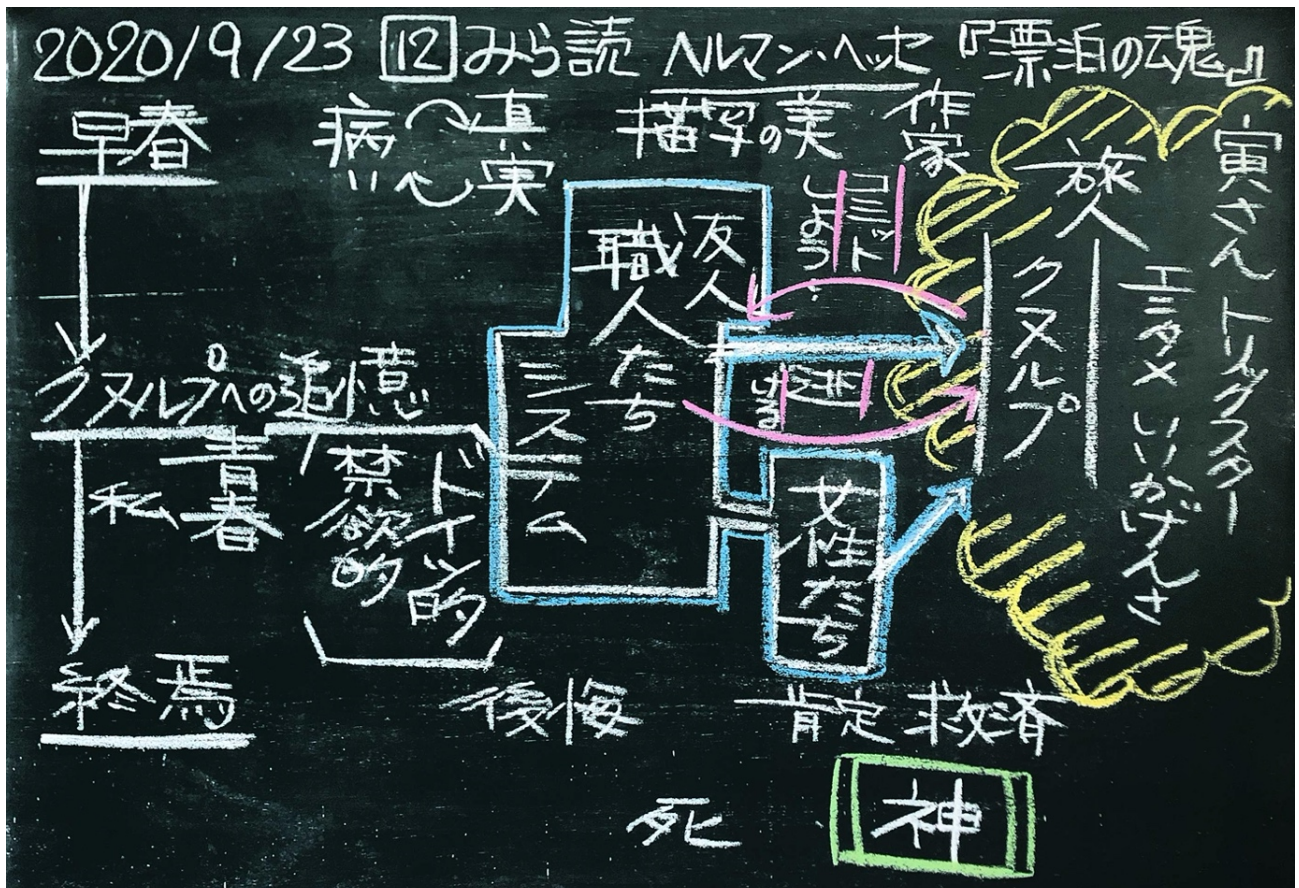
C: 午後は大丈夫です。

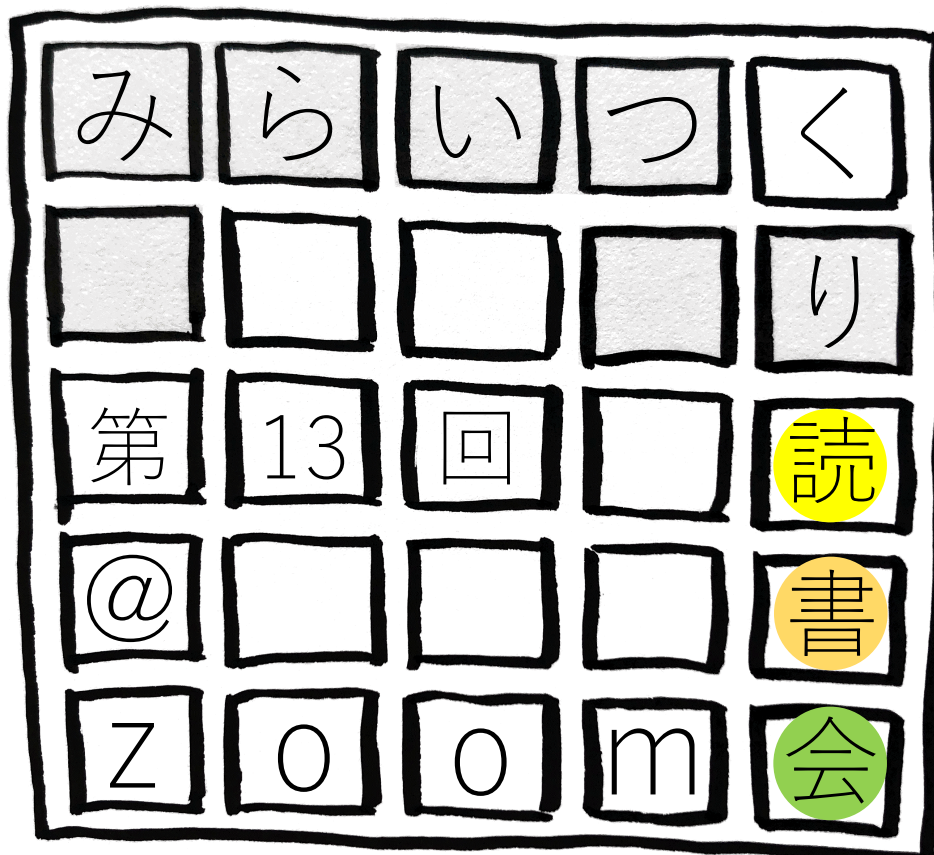
D: 4時から5時にしてみますか？仕事終わったなと思う時間ですよ。

B: では8日の4時から5時、『星のお王子様』をお願いします。

D: 『白い病』もぜひ読んでみてください。

B: では、ヘッセはさらっとしていましたが、次に進みましょう。ではまた。





【日時】

2020年10月8日(木)16:00~17:00

【課題図書】

サン・テグジュペリ『星の王子さま』

※どの訳でも構いません。

青空文庫の場合は『あのときの王子くん』を検索してみてください。

【参加方法】

興味のある方は、以下事務局までご連絡ください。

zoomのアドレスとパスワードを添付して返信いたします。

事務局：みらいつくり研究所 松井

Eメール：matsui-ka@kjnet.onmicrosoft.com

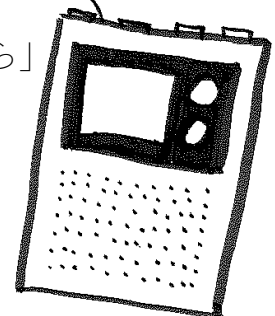
「ラジオ参加」も大歓迎！

「ちょっと議論には加われない」「その時間は作業しているから」
そんなみなさんにおすすめの「ラジオ参加」。

zoomのカメラをオフにして、ラジオみたいに聞き流す。

そんな「学び」があっという。そんな「参加」があっという。

興味のある方はぜひ事務局にお問い合わせください。



みらいつくり大学校企画

第13回みらいつくり読書会@zoom 記録

第14回は、2020/10/19の16:00~17:00に行います。興味のある方は下記事務局までご連絡ください。

事務局 みらいつくり研究所 松井

Eメール：matsui-ka@kjnet.onmicrosoft.com

【課題図書】	【実施日時】	【参加者】
サン・テグジュペリ 『星の王子さま』	2020/10/8 16:00~17:00	A,B,C,D,E,F(+ラジオ参加5名)

内容（※語尾を中心に編集しています）

A：みなさん、どの訳で読みましたか？

B：私は青空文庫で読みました。『あのときの王子くん』です。

A：すごい名前ですね。

C：私は河野万里子さんの訳を新潮文庫で読みました。

A：一番売れていそうなやつですね。僕は池澤夏樹さんの訳を読みました。池澤夏樹さんのエッセイが好きですし、他の人が読んでいない訳を読んだ方が良かったかなと思いました。

D：僕は、小島俊明さんの訳を読みました。5年前に読んだ時には、内藤濯さんの訳でした。

C：内藤訳が日本では主流だったと何かで読みましたね。

A：オリジナル版でしょうか。

C：それしかなかったけれど、著作権が切れて、他の訳が出たんだと思います。

B：今日はEさんも参加です。

A：それだけつくっても売れるということなんですね。内藤さんの訳は『星の王子とわたし』というタイトルもついていますね。

C：Eさんはいかがですか？どの訳を読んだかという話をしていました。

E：ごめんなさい。

B：あらずじだけ読んで参加してくれました。

A：全然良いと思います。

C：感想を話していきたいと思います。私からいきますね。

A：その本が友人のお父さんにもらった本なんですか？

C：もらったというか、勧めていただいて、その時に買って読んだんですね。確かに、教師になる人に勧めたら良い本なんだろうなと思いました。私は、わからないこともありながら読みました。大きく分けると、大人と子どもの比較があるなと思いました。大人性と子ども性の比較がこの本の大きな構成になっていると思います。私が思ったキーワードは、「大いなる神秘」です。その言葉とともに用いられている挿絵があります。何も書かれていないように見える絵に、どんな存在を感じていくことができるかということが、神秘ということなのかなと思いました。私はこの本を読みながら、Aさんの以前話していた「不在の存在」という言葉を思い出しました。その人が今生物学的に目の前にいなくても、その人との関わりを考えたり思い出したり、そのようにして関わっていくということがあると思います。そんなことが「大いなる神秘」なのかなと想像しながら読みました。

B：私は最後まで全部は読めなくて、途中からネタバレを読みました。平仮名が多くて読みにくかったです。つまずきました。温泉とかホテルとかで一人になった時に読みたい本だなと思いました。何かをしながら、誰かがいるところではなく、一人で読む本には良いなと思いました。子どもの心と大人の心、とCくんが言っていました。うちでは、真ん中の子どもが、広汎性発達障害です。その子はどこかに入りたがりです。毛布にくるまったりするんです。安心するみたいです。先日、赤ちゃん用の布団を捨てようと思いましたが、その布団に布団カバーをつけてその中に入り込むのが大好きでした。布団カバーのチャックを開けて、フリースを中に持ち込んで、じーっとしているのがすごい好きなようでした。そういう私にはわからないけれどこの子にとって大切なものというのが、この『星の王子さま』に書かれているんだと思います。ネタバレの記事で「子どもの頃を思い出させる」とか「時間をかけて」とか書いてあるのはわかるような気がしました。忙しい中で読むともしかしたらイライラしてしまうかもしれません。もしかしたら、自分の心が現れる本なのかなと思いました。もうちょっと時間をかけて読みたいなと思いました。

E：さっきBさんにも話しましたが、偶然にも、子どもの頃に使っていた枕の柄が『星の王子さま』でした。自分で選んだわけではないので、おそらく母が独断と偏見で選んだんだと思います。母にどんな意図があったのか、おそらく何も考えていなかったと思いますが、ここで繋がるのも面白いなと思いました。Bさんに誘われてからインターネットで見ましたが、こんなに長い作品だったんだと思いました。1時間でパッと読むべきじゃないかなと思いました。私も時間をつくって読み返してみたいと思いました。内容まではコメントできません。

C：おそらく、枕にかかれた絵は、有名などれかですよ。

E：王子様が立っていて、小さなバラが咲いているという絵でした。なんでこんな小さい星で、なんで人はこんなに大きいんだろうと子どもながらに思っていた記憶があります。

C：おそらくその辺りも、この作品のポイントなのかもしれません。

D：僕は、四年前に読んでいます。その時、なんでだか分かりませんが家にこの本があったんですよ。多分、ブックオフで100円でこの本を買ったんです。100円で買った本って全然読まないじゃないですか。僕も全然読んでなくて。何かで引用されていたのをみたことがあって、読みたいなと思いました。でもその時の本は手元にないので、おそらく売ったんだと思います。今回は図書館で借りて違う訳で読みました。面白いほど忘れていました。「次はどうなるんだろう」と思って読みましたから。新鮮に読みました。今回気がついたことが二つあります。一つは、一番有名な「大切なことは言葉にならない」というセリフがあります。一番大切そうなあのセリフって、王子様が言っていないんですよ。いろいろなところで引用を間違えている人たちがいます。星の王子さまが言っているようにした「大切なことは言葉にならないんだ」という引用がたくさん世の中にはあります。だけど、本当は狐が言っているんですよ。もう一つは、読んでいて、これは銀河鉄道999だと思いました。多分、銀河鉄道999はここから来ているんじゃないのかなという説を僕は今回思いました。銀河鉄道999をしっかりとはみていませんが、あれは、異様な星に行き、異様な人たちに会って、それらがこの世界の矛盾のメタファーになっているという話です。完全に同じようにして5つの星に出てきています。権力しかない星、金しかない星…というようにです。銀河鉄道999はここから来ているんじゃないかなと思いました。この二つが僕の感想です。

A：僕は2015年くらいにフランスに行ったことがありました。何となくその国に行くとその国の言語

で書かれた本を買いたくなるじゃないですか。でも 100 円で買った本と同じくらい読まないと思います。結局パラパラとめくって中身がわからないままだったので、今回は初めて読みました。さっき、Bさんが「一人で読みたい本」と言っていました。僕は寝る前に一人で読んでいたので、結構読んでいて泣きそうになりました。「本を読んで泣きそうになる」とかよく言うけれど、僕はみんな嘘をついていると思っています。自分でページをめくっています。テレビだと向こうから入ってくるので「おおー」と思うかもしれないけれど、本は自分でめくっているじゃないですか。「ああー」とか思っているも、「自分でめくってるじゃん」と考えると覚めちゃいます。

C：そんな意見は初めて聞きました。

A：「あなたはページをめくると涙する」とかあるじゃないですか。めくらなきゃいいのに、と思います。

D：「泣きながら一気に読みました」とかですね。そんな人見たことないですよ。

A：自分の意思が介在しているんだなと思ってしまいます。

A：ハイデガーの『存在と時間』と並行して読んでるので、そういう解釈になってしまいます。大人と子どもを対比していると言っていました。子どもの感覚でとらえる世界、つまり子どもの感覚と大人の感覚を対比させているということなんだと思います。大人でいうところの常識で世界を捉えてしまうことへの批判なんだと思います。「大切なものは目に見えない」というセリフもそうですが、最後にも「子どもにしか見えない」「大人たちには理解できないだろう」というように書いています。「固有性」についても書かれていると思いました。星の王子さまの星に咲いていた花と同じ花が地球に5000本くらい生えていたという話があります。「いっぱいあるじゃん」と思いつつ、それを自分の星の花に伝えたら落ち込んじゃうだろうという部分があります。だけどそうではないということに気がつきます。先程のDさんの話と同じように、王子様もわかっていないんです。目に見える範囲では同じ花に見えるけれど、その向こう側にある固有性は別にある。そんなことを言いたいのかなと思いました。もう一つが「飼いならす」の部分です。狐が「僕を飼い慣らしてよ」と狐が言います。「飼いならす」ってどういうことかなと思いました。最後の方まで見ていると、固有性を捉える、固有性があるものとして関わりをもつ、ハイデガーがいう「馴染む」ということかと思っています。「世界に住む」というような、本当の関わりともつということかと思いました。動物とか物とかに対して、そのような関わりをすることを「飼いならす」と言っているのかなと思いました。ハイデガーはよく「ものをものする」と言います。ものがただのものではなく、人間に馴染む形になるというような意味です。一番最後のシーンは看取りのシーンに見えました。星の王子さまが亡くなっていくプロセスを、ぼくが見ているというようなことです。そんなことを印象付けるような最後の絵です。Cくんが言っていたように「不在の存在」というようなことなんだと思いますが、最後の絵にはもういないですよ。でも「いる」というようなことです。そこには見えないけれどいるんだと言いたいがための最後の絵です。全く同じ絵に王子様がいるかいないかということです。他の訳を読みたいなと思いました。私は本を読む時に、ガッとページを開きます。私が買った本は、強く開くと落丁しそうになりました。だから気を使いながら読むしかなくて、自分固有の読み方ができませんでした。

C：「飼いならす」とありましたが、私の読んだ訳では「なつく」となっていました。

A：「馴染む」とか「親しむ」ということかもしれませぬ。

C：キツネが初めに「君とは遊べないよ」と言います。「まだなついていないから」と言っています。

「馴染む」「親しむ」そのような意味ですね。キツネとの会話もこの本の大切な部分になってくるように思いました。

B：この絵もサンクチュペリ描いたんですよね。知りませんでした。サンテグジュペリですね。

C：最初言えていませんでしたね。

A：急に韓国語みたいになりました。

B：文章も絵も同じ人が書いているんだなと思ったんです。

A：サン・テグジュペリですね。

B：そうです。サン・テジュグペリ。

C：もう言えてませんね。私は今回の読書を通してサン・テグジュペリと言えるようになりました。私は数ヶ月前に『夜間飛行』を読みました。似たようなところもありつつ、大人向け子ども向けの違いがあると思うので、面白かったです。最近お気に入りの『国語便覧』にもサン・テグジュペリについて書いてあります。行動主義文学の代表的作家となったとあります。ここには「心理描写を極力排し、行動に人の本質を求める」とあります。でも『星の王子さま』には心理描写があるような気がして読んでいました。サン・テグジュペリは何を言いたかったのか、何を批判したかったんだろうと思いつつ読みました。多分、世界の見方もそうですし、途中で出てくる王様や酒浸りの人なども皮肉に書いているんだと思います。何度も夕陽を見るシーンがあります。ここでは何を批判したかったのでしょうか。そんな批判の対象がはっきりわかったらもっと楽しく読めるのになと思っています。

A：あの夕陽も、1日に一回太陽が昇って沈むというのは常識だけれど、ハイデガー的かというと頹落した通俗的時間概念なんだと思います。これは必ずこうなってこうなるというようなものです。でもそうではないと、子どもの感覚では違うと言いたいのだと思いました。酒飲みの人は、恥ずかしいことを忘れるために飲んでいると書いてありました。何が恥ずかしいのと聞くと、酒を飲むのが恥ずかしいと言っていました。河島英五の歌が流れてきそうでした。

B：人間の欲求が出ていますよね。王様の権力、酒飲みの欲望などです。人間の欲求が星に現れているのかなと思いました。

D：部屋から出ない地理学者とか、規則正しくランプを灯す人ですよね。類型化するというか。ランプの人だけは友達になれそうな気がしたんですよね。王様、見栄っ張り男、所有するビジネスマン、飲むことに取り憑かれた人、ランプ男。ランプ男だけはまともに見えたとあります。それは、ランプ男だけは自分に夢中になっていないからだとあります。それはすごく印象に残っています。この人は他の人から軽蔑されるだろうな…とあります。自分に夢中になっている人とそうでない人というのは大きな線引きがあるんだと思いました。キリスト教的に言うと、偶像の定義と重なると思います。僕は、偶像は煮詰めると自分に夢中になることだと思っています。

A：自分以外のものの世話をしているからだとありますね。

D：訳によってだいぶニュアンスが変わるのかもしれませんがね。

A：『あのときの王子くん』ではどうですか？

B：『あのときの王子くん』だけばかにしていませんか？どうやって書いてあったのでしょうか。

A：「自分じゃないことにあくせくしていたから」ですね。全然違いますね。

B：他の訳もこんなに平仮名が多いんでしょうか。星、王子くらいしか平仮名じゃないです。

A：「電気」に振り仮名がふってあるくらいですからね。

C：その後、17節で蛇が出てきます。蛇と聞くと、私は聖書を思い出します。17節で「大人たちは大きな場所を占めていると思っている」とあります。「バオバブみたいにすごいものだと思っている」ともあります。バオバブや大人たち、蛇は批判の対象なのかなと思いました。

A：色々とはこれはなんかのことを言っているんだろうな、と思うものが出てきますよね。散りばめられています。

D：なんかジブリっぽいですね。『千と千尋の神隠し』でもそうですが、何かの象徴性がある。作者も意図していないことをこちらが読み込むことが多い作品なんだと思います。

A：それが優れた文学の特徴ですね。作者の意図を超えている。

D：そうですね。解釈に開かれていることですね。読み継がれるわけですね。これは全世界的に人気がある本なんですか？

A：そうなんじゃないですかね。

C：インターネットのサイトには「聖書の次に売れているんじゃないか」と書いているものもありました。

A：日本でこれだけ出版されていることを思うと可能性はありますよね。

D：日本で局地的に流行っていて、世界的に人気があると思ったらさほど人気なかった、ということが時々ありますよね。ハイジとかそうなんですよ。日本でとても人気があるのですが、世界的にはスイスの文学マニア以外はあまり知らないようです。『フランダースの犬』もそうらしいです。『フランダースの犬』の最後のシーンありますよね。そこには銅像があります。日本人しか来ないらしいです。そんな現象ってあるから、『星の王子さま』もその類なのか、あるいは本当に世界的に人気があるのか、とっていました。

A：『星の王子さま』は後者じゃないですかね。

D：僕は、日本で人気のある理由は「大切なことは言葉にできない」だと思います。日本の伝統にある禅の「不立文字」はまさに「大切なことは言葉にできない」という意味です。そういう心象性を日本人はもっています。言葉にした時点で嘘臭くなる。語るに落ちるといような。大切なことは言葉にできないんだ、というのは日本人の心象性によく合うんだと思います。それがはまったのかなと思っています。

A：この『星の王子さま』は「日本人だとすごくわかる！」という感じでもないような気がします。

D：全貌を読むとそうですね。

A：全然違いますよね。

D：「日本だなー」という感じはしないですね。「大切なことは言葉にできない」というのが日本でバズるということはあるなと思ったんです。日本の長い伝統と本当に合致しているから。

A：話は違いますが、26節で、蛇の話になります。「きみが噛まれると困るからね」…「二度目に噛むときには毒がないんだ」と言います。これってなんですか。

C：意味がわかりません。

A：誰かが犠牲になったら後の人は大丈夫ということでしょうか。わかりませんね。

C：これも何かを象徴しているのだからと読んでしまいますよね。

A：蛇に噛まれて死ぬんですよね。

B：ネタバレにはそう書いてありました。

D：蛇に噛まれて死んだかどうかはわかりませんよね。そんな感じですよね。この話自体が、夢オチ
というか、現実にあったことかどうかはわかりませんように書かれていますよね。フィクションライン
をどこに設定していいかわからない話です。フィクションラインを、最初と最後の「6年前不時着し
た」というところに置くと、この人が極限状態で見た、トランス状態で見た夢なのかもしれないです。
そういう解釈も成り立つし、本当にあったことなんだという解釈も成り立つようなつくりになってい
ます。だから、物語に整合性があるかどうかにはあまり意味がない話なのかもしれません。プロット
に破綻があって当たり前、そもそもトランス状態で見た夢なんだからということですね。

A：構造化したいですね。最初から最後まで読んでしまいましたが、何節から何節まではこの話、とい
ったように書いてみたいです。

B：Eさん引いていますよ。

A：なんでー。枕にしていたからって。

C：このあとでしにくい話ですが、構造化を試みました。

A：どんな構成になっていますか。

C：やはり6年前を思い出しているというのが基本にあります。別の視点ですが、だいぶ前に買った雑
誌に『星の王子さま』について書いていました。kotobaの孤独を特集した回です。

A：kotobaはいい雑誌ですね。

C：ここで『星の王子さま』について書かれていました。行動主義文学ということも書いてありました。
「私」として出てくる一人称は、おそらくサン・テグジュペリの投影です。でも王子も、自分自身なの
ではないかと書いてありました。

D：そういうことなんですよ。『マルホランド・ドライブ』という映画があります。デヴィッド・リ
ンチです。めちゃくちゃ不可解な映画として有名です。それは夢なんだけど、夢の中で妬む相手が自
分なんです。本当に訳がわからない。どこが夢でどこが現実なのかわからない。時系列をずらしてい
るのがあります。いろいろな解説があるんだけど、多分こうだという定説があるせいで、夢とい
う構造を取ると、自分が誰かということが意味をなさなくなります。だから、キツネも自分自身なの
かもしれないんですよ。ヘビも自分なのかもしれません。自我が溶け出している感じですよ。た
だ僕は、一貫して一番に押し出しているメッセージ性みたいなものをあえて一つ挙げるとすれば、「セ
ンス・オブ・ワンダー」という言葉で表される言語とか数値とかに還元せずあるがままに驚くとい
うようなことを大人になると忘れてしまう、それらを思い出そうぜということではないかと思いま
す。夜空を見上げたときに羊がバラを食べたのではないかと、食べなかったのだろうか、食べなかつ
たとしたらこの世界は輝いているが、食べたとしたら星空は涙色なんだ、というのは、子どもしか考
えられないです。でもそういうことを思い出そうよという話なのかな、と思いました。彼はそれを一番言
いたかったのかなと思いました。

C：kotobaには、王子にとってもイニシエーションの物語だし、飛行士である自分にとってもそうなん
だと書いてあります。孤独を通したイニシエーションなんだとありました。別な記事に書いてありま
したが『星の王子さま』の冒頭、「レオン・ヴェルトに」とあります。ユダヤ人で、フランスに住んで
いるけれどナチスの弾圧を受けている。サン・テグジュペリはアメリカに亡命をしています。

A：そうなんですか。

D：テグジュペリはユダヤ人なの？

A：そうじゃないよね。亡命していないんじゃないですか。フランスで郵便飛行をしていたんですよ。

C：『星の王子さま』の訳者のあとがきには「亡命先のアメリカで発表した『戦う操縦士』では」とありますね。

A：なんのために亡命したんでしょうか。

C：あとがきには「亡命先のアメリカで発表した『戦う操縦士』は、ヒトラーの『わが闘争』に対するデモクラシー側からの最良の回答と高く評価された」と書いてあります。

A：どう考えてもユダヤ人の名前ではないですよ。

C：確かにそうですよね。

D：ユダヤ人を擁護するような発言をしていたからという理由でしょうか。

A：アントワヌですからね。フランスですよ。

D：レオン・ヴェルトはなんですか？

C：そのレオン・ヴェルトはフランスでユダヤ人として弾圧を受けていた人だから、反ナチや平和主義のメッセージとして『星の王子さま』が書かれているんじゃないか、という読み方もあるようです。

D：1943年ですよ。フランス語の初版は。まさにそんな時期ですよ。

A：亡くなったのはどのくらいでしょうか。

B：44年とありますね。

C：亡くなったときに飛行機の中から所持品として別な新しい本が見つかったけれど、出版された本としては『星の王子さま』が最後だったと書いてあったと思いました。

A：1948年に『城砦』とありますね。これは死後に発表されています。『人間の土地』という作品もありますよね。この作品が『星の王子さま』の前です。

A：Fさんは『星の王子さま』を読んだことがありますか？

F：読んだことがあります。家にあります。なんだかわからないなという感想で終わった記憶があります。

A：ラジオ視聴している人でわかる人いるでしょうか。

F：不思議な世界というか。よくわからないまま子どもたちに読み聞かせていました。

A：子どもたちに読み聞かせるには長いですよ。

F：長いですよ。一人で読んで、子どもたちは入れ替わり立ち替わりでした。

B：最後まで聞く子はいないんですか？

F：まあ、それでいいですよ。

A：長い上に、夜寝るときに読んだら「どういうことだよ」「寝られないわ」ってなりそうですよね。

F：どういうことだよ、と思いますが、それは大人だけで、子どもはそんなこと考えないのかなと思います。今日話題に挙がったのもう一度読んでみようと思います。これってなんなんだろう、と思わせるという世界なんじゃないですかね。

C：そんな話をしていたんですよ。

B：核心をついた感じですよ。

A：前の方に王様の話があります。王様が最終的に「大使を命ずる」と言います。でもその声には威厳があったとあります。最後に王子様が「大人というのは変だな」と考えながら、また王子様は旅路にいたとあります。この王様、どうしたらいいんでしょうね。威厳をもって大使に任命したのに「大変だな」と思われちゃう。

F：それが次のステージに進ませたんでしょうかね。ひらめきで喋っていますが。

A：20 節で王子様が花の上に倒れて泣きます。これは、自分の星で一つしかない花だと思っていたのに、ここの庭だけで 5000 本も咲いていると知って、誰ももっていない花を持っているから豊かだと思っていたけれど、僕のもっていた花は普通の花だった、と倒れて泣きます。どういことでしょうか。特別な花というのは、最初に出てきた痴話喧嘩をした花ですよ。どういことなんですかね。

C：私は、先ほど話題になっていた「固有性」ということについて書いてあると思いました。「ぜんぜん固有じゃないんだ！」と思って泣いたんだと思いました。でもその後にやはり固有だったんだと気が付きますよね。

A：そういうことを、旅をすることによって知ったということですよ。旅をする前に花と喧嘩をしていましたよね。この花の感じもよくわからないんですよ。他の訳がどうなっているかわかりませんが。まあまあ機嫌が悪いです。

C：つれない感じですよ。

A：そこにいたら気になるから、ぐずぐずしないで行ってよ、みたいなことを言います。本当は行って欲しくないんでしょうけど。そんな感じ。難しいですね。

D：ちょっとユングっぽいんですよ。オルターエゴとか、アニマとかアニムスとか。

A：「影」のような話ですよ。

D：そんな解釈をしていそうな話ですよ。でもこういうのって往々にして書いている人は何も考えていないということが多いですよ。宮崎駿もそうですけど。ポニョは子宮のメタファーで～とか言われていますよね。

B：トトロは実は死んでいたとか。

A：ポニョは結構怪しさがありますよね。

D：ただ宮崎駿はそこまで考えていないのか、それとも宮崎駿がトランス状態でみた夢っていうことですよ。ポニョとかは。論理的には破綻しているからこそ、真実に肉薄できることがありますよね。

『星の王子さま』は難解な話ですよ。

A：難解でした。もうちょっと勉強して出直します、という感じです。

C：これが議論になるかはわかりませんが、私は、サン・テグジュペリが平和主義者というか、戦争に反対しているんだと思っていました。でも本人は飛行機乗りで戦争に行くことを選んで死に至ります。『夜間飛行』でも自分の命を犠牲にしても戦うことを肯定的に捉えているように私は読んでいます。必ずしも「ナチスに反対すること」が「戦争をしないこと」ではないんだなと思ったんです。そのあたりで、私は彼の言いたかったことはなんだったんだろうとわからなくなっています。私も解説本とかも読んでみたいと思っています。

A：その辺りについてですが、『人間の土地』の新潮文庫版のあとがきを宮崎駿が書いているんです。

D：あーそうですか。

A：表紙の絵も宮崎駿なんです。

D：それは面白いですね。

B：ナウシカっぽいです。

A：宮崎駿が、あとがきに、C くんが言ったようなことを書いています。宮崎駿はどちらかという平和主義、反戦主義じゃないですか。だけど飛行機は大好きです。飛行機というのは、結局は武器なんだ

けれど、武器としてつくられたんだけど、宮崎駿も子ども時代に飛行機に憧れていたし、アニメーション作家になった今も憧れをもっている、ということが書いてあります。「飛行機の歴史は凶暴そのものであるが、僕は飛行機たちの話が好きだ。…僕の中に凶暴なものがあるからだろう。…日常の中だけでは窒息してしまう。」と書いてあります。これを読んで、かつ『風立ちぬ』とかを見ると色々考えるところありますよね。単純に戦争反対、とかいうことじゃないんでしょうね。

D：『紅の豚』ってイタリアが舞台でしたっけ。それでもなんだかサン・テグジュペリを彷彿とさせるなと思ったことがあるんです。あの時代の飛行機に乗っていて、冒険をしている。

A：ジブリに似ているというのは、宮崎駿はサン・テグジュペリが結構好きなんじゃないですかね。

D：そうかもしれないですね。

A：次どうしますか？

B：次のこと、少し調べました。私が読書ネタバレを検索してきたときに出てきたやつなんですけど。読書ブロガーの方が、海外古典文学おすすめという記事を書いていました。25歳の方です。今まで読んだ『イワンの馬鹿』とかカフカ『変身』とか入っていました。一つが、トーマス・マン『トーニオ・クレガー』です。ドイツの方です。

A：ドイツは、こないだ読み終わりましたよね。

B：カフカやヘッセを読んだ人におすすめと書いていました。もう一つはフランスのカミュ『異邦人』です。

A：だからフランスも今回やりましたよね。

B：だっておすすめって書いてあったから。

A：違う国に行きたいんですよ。

B：だってイギリスとかスペインとかなかったんだもん。

D：カミュね。

A：僕は他のヨーロッパで、と思って探しましたよ。しかも短いやつです。

B：素晴らしい！

A：そんなに短くはないかな。イギリスだとシェイクスピアですよ。『マクベス』が一番短いです。スペインだとカルメンです。ギリシャだと『オイディプス王』でしょうか。エディプス・コンプレックスのやつですね。

C：ロシア、ドイツ、チェコ、フランスと来ていたので、次はイギリスかなと思っていました。

A：それか北欧でしょうかね。

C：確かに。

A：北欧だとイプセンの『人形の家』がすごく短いんですよ。でも戯曲ですね。イギリスとかも古典となると戯曲が多いかもしれません。

B：今言ったやつ面白かったんですか？

A：まだ読んでいません。これからです。

C：アメリカ文学に行くには少し早いですよね。

A：アメリカに行ってしまうと…。

B：帰ってこれない…。

C：アフリカを通り越していますしね。

A：いつかラテンアメリカに行きたいですけどね。

D：『やし酒飲み』は大丈夫ですか？

A：アフリカ行きますか？『やし酒飲み』は相当特殊ですよ。アフリカとラテンアメリカは似ているんですよ。ラテンアメリカだと長いけれど『百年の孤独』を読みたいです。

D：ガルシア・マルケスでしたっけ。

C：気合入れないと読めないですね。シェイクスピアは読んだことありますか？

A：ないです。

D：僕もないので一度読んでみたいです。

A：だから買って見たんですよ。

B：それ一冊『マクベス』ですか？

A：一冊『マクベス』です。

B：もうお腹いっぱいになっちゃいました。

A：でも後ろの方は解説だから。全部で140ページです。そして戯曲だから短いんですよ。

C：チャベックスタイルですね。

A：後は、青空文庫に『あのときのマクベスくん』があるんじゃないでしょうか。

B：なんですかそれー。シェイクスピア行ってみますか。読めなかったらみんなに頼ります。

A：青空文庫には坪内逍遙の訳がありますね。違うのかな。

D：漫画で読破、というのがありますよ。

B：最終的には漫画で。

D：ありですね。

C：『ベニスの商人』はめちゃ長いですか？

A：シェイクスピアで短いのは『マクベス』と書いてあった気がしますね…。

B：短い方がいいな…。

D：シェイクスピアは読みたいです。いわゆる英語を使う国では、小中学校の教科書に出てくるんですよ。みんな知っているんです。これを一冊読んでおくと、シェイクスピアを読んでおくと、海外の人と話しやすくなるんだろうなと思っています。

C：シェイクスピアだと、やはり『マクベス』が読みやすいでしょうか。

A：読みやすいのは『ロミオとジュリエット』と『ベニスの商人』と書いてあります。岩波文庫になっているもので一番短いのはおそらく『マクベス』ですね。『ロボット』よりは短いと思いますね。『ロボット』は結構長かったですよね。いけると思いますよ。

C：『マクベス』にしてみましようか。

A：『オイディプス王』読みたいです。

C：よく引用されていますよね。

A：これは短いですよ。イギリスに行く前にギリシャはどうですか？ギリシャ神話、ギリシャ悲劇だから読んでもいいんじゃないですか？

B：エディプス王？

A：エディプス・コンプレックスってあるじゃないですか。

D：そうです。『海辺のカフカ』ですよ。「お前は父を殺し、母と寝るだろう」というのがありますよね。

あれはここから来ているんですよね。

A:でも本書では、エディプスはそのことを知らないんですって。知らないうちにそういうことになっちゃうということみたいです。ギリシャ悲劇行きましょうよ。

C:それでも良いですね。さっき D さんが言っていた漫画で読むシリーズがある本はいいかもしれないですね。

A:青空文庫にありそうですね…ないかもしれません。

D:『漫画ギリシャ神話』とありますよ。中公文庫から出ていますね。

A:「100分de名著」にもありますね。

B:あ〜。

A:じゃあ『オイディプス王』にしましょう。南欧に行く感じで。

C:はい。いいですね。

A:南欧に行って、それからイギリスでしょうかね。それかスペインの『カルメン』を挟んでイギリスか。

C:イギリス行って、アフリカ行って、ラテンアメリカに行きたいですね。

A:アフリカに行って、南アメリカに行って北上すると良さそうですね。間にキューバを挟むとか。

C:日程はどうでしょうか。

...

C:時間帯はどうしましょう。13時にするか、それとも今回ラジオ参加して下さった方が多かったので16時にするか。もしかすると時間帯ではなく『星の王子さま』だったからかもしれませんが。

A:『オイディプス王』で激減したらどうしましょう。可能性はありますね。

C:では、19日(月)16:00~17:00でお願いします。『オイディプス王』でお願いします。そのうち、読書会の小テストをやるかなと思っています。顔と名前を線でつないでいく問題です。それではこれで終わります。ラジオ参加の方もありがとうございました。

